



木^き積^{づみ}の箕^みをつくる

千葉県匝^{そう}瑳^さ市木積

木積の箕をつくる 千葉県匝瑳市木積

東京文化財研究所 無形文化遺産部



はじめに

平成 23 年に発生した東日本大震災は、地域に伝わる民俗芸能や祭礼行事、民俗技術といった無形の民俗文化財の伝承にも大きなダメージを与えました。東京文化財研究所 無形文化遺産部ではこの巨大災害以降、災害と無形の民俗文化財の伝承について考え続けてきました。平成 26 年度からは、国立文化財機構が進める「文化財防災ネットワーク推進事業」の一環として、無形の文化財の「防災」についての検討も始めています。本書はその事業のひとつとして、「民俗技術の防災」を検討する中で生まれたものです。

民俗技術は暮らしの必然の中で育まれてきた、自然素材と手仕事を基本とする技術です。本書で取りあげた箕（穀物の選別や運搬などに用いられる道具）を作る技術もそのひとつで、フジやタケなどを加工し、箕に仕立てあげていくには高度な技術を必要とします。

民俗技術の防災や災害時の復興支援について考えることは、実は平時における伝承の在り方を考えることに直結します。たとえ大きな災害がなくとも、民俗技術はたえず消滅の危機に晒されているからです。少子高齢化や職業の多様化、暮らしの変化による技術の需要低下等により、後継者不足はどこも深刻です。山が荒れて原材料が確保できなくなったり、道具の作り手がいなくなって入手やメンテナンスができなくなるなどの問題も発生しています。民俗技術は生活の糧であることが多く、技術が売れなければ生活そのものが成り立ちません。最も社会変化の影響を受けやすい分野だと言えるでしょう。

災害や社会変容の荒波の中で民俗技術をどのように後世に伝えていくのか、様々な取り組みが各地で試みられていますが、ひとつの方法が映像や文字による「記録」です。特に人の動きや時間の経過を捉えることのできる映像は、技術記録には大変有効です。しかし従来の映像記録は研究用や普及用として短い尺にまとめられたものが主流であり、技術伝承や復元を目的に作られたものはほとんどありませんでした。そこで、災害や後継者不足などによって万が一技術が途絶えたり変質してしまった時、どういった記録なら技術の復興・再現の手がかりになりうるのか、その在り方を検討しようと始まったのがこの事業です。

モデルケースをお願いしたのは千葉県そうき匝瑳市に伝わる「木積きづみの藤箕ふじみ製作技術」（国指定重要無形民俗文化財）です。木積の箕はフジとシノダケ（アズマネザサ）で作られます。軽さと丈夫さを兼ね揃え、最盛期であった大正期から昭和 30 年代にかけては年間 8 万枚もの生産量を誇りました。しかし近年では需要が激減し、技術を持つ人の高齢化も進んでいます。木積では平成 21 年の国指定を契機に木積箕づくり保存会を結成、毎月 1 回「木積箕伝承教室」を開催し、後継者の育成に努めてきました。毎回十数名の「生徒さん」が参加する、非常に活気にあふれた伝承教室です。一方で「先生」が 80 歳を超える方々ばかりであること、月に一度の教室では時季に応じた作業を行うため各工程をじっくり学ぶ機会が少ないなど、課題も抱えています。そこで箕づくりの技術伝承を助ける記録になることを目指し、手法や内容について先生や生徒さんたちと検討を重ねながら、本報告書と 6 時間強におよぶ映像をまとめました。

技術の記録には終わりがありません。ここで記録（認知・言語化）できたことも全体の一部にすぎないでしょう。逆に記録しすぎることが新たな技術習得のモチベーションを落とすこともありうるかもしれません。こうしたことを含め、今後は、作成した記録の検証作業を行っていくこととなります。いずれにしても、本書がひとつのきっかけとなり、民俗技術の伝承と記録についての議論や理解が深まっていくことを願っています。そして何より、本書を木積箕伝承教室の皆さまに活用していただければ、これほど嬉しいことはありません。

最後に、快く撮影におつきあいくださった秋葉千枝子さん、保存会事務局長の行木光一さんをはじめ、木積箕づくり保存会や伝承教室の皆さまに、心より感謝いたします。また報告書の執筆・編集に当たっては山本美佐子氏、國井秀紀氏に並々ならぬご協力と励ましをいただきました。記して感謝申し上げます。

目次

はじめに i

工程表 iv

第1章 箕づくりの基本

箕の構造と名称 2

基本の道具といろいろな箕 名称と用途 4

第2章 材料の採集と加工

シノダケの採集と加工 イタミの横材（ヒゲ）をつくる 10

1. シノダケの採集 10

2. シノダケの加工 11 (1) シノコガシ 11 (2) シノサキ 11 (3) ヒゲヘゲ 13

フジの採集と加工 イタミの縦材（ウナンカワ）をつくる 14

1. フジの採集 14

2. フジの加工 16 (1) フジコガシ 16 (2) フジタクリ 17 (3) カラトリ 18

モウソウチクの採集と加工 ウデギの材をつくる 20

第3章 イタミづくり

素材の調整とユミ張り 24

1. フジを整える 24 (1) ズリカケ 24 (2) フジヘゲ 24

2. ヒゲを整える 25 (1) ヒゲアライ 25 (2) ヒゲ選び 26

3. ユミ張りヒゲ通し 26 (1) ユミ張り 26 (2) ヒゲ通し 27

イタミづくり カシャゲメエとヒックリカエシメエをつくる 30

【基本の考え方と留意点】 30 (1) フジコサエ 30 (2) イタミをつくる 32

【様々な調整】 33

1. カシャゲメエをつくる 34

(1) ナカをつくる 34 (2) ナカのアクド側をつくる 35

(3) アクドをつくる 35 (4) ナカのみサキ側をつくる 36 (5) ソデをつくる 37

2. ヒックリカエシメエをつくる 38

(1) ナカのみサキ側をつくる 38 (2) ソデのみサキ側をつくる 39

(3) ナカのアクド側とアクドをつくる 39 (4) ソデのアクド側をつくる 39

3. イタミの仕上げ 40

第4章 仕立て

素材の調整 ウデギとカラをつくる 42

1. ウデギづくり 42 (1) 準備 42 (2) 整形 42

2. カラヘゲ 43 (1) 準備 43 (2) カラヘゲ 43

仕立て オオゲエシトシホンバリ 44

【基本の考え方と留意点】 44

1. アクドを縫い合わせる 45 (1) 準備 45 (2) アクドを縫い合わせる（トツケ） 45

2. ウデギを結いつける 47 (1) ウデギをはめる 47 (2) ウデギをカラで結う 47

3. ヒゲの処理 48 【調整の仕方】 48

(1) ヒックリカエシメエのオオゲエシをつくる 49

(2) ヒックリカエシメエのシホンバリをつくる 50

(3) カシャゲメエのオオゲエシとシホンバリをつくる 51 (5) ミサキの処理 51

4. アクドの補強 53

用語集 54

あとがき 協力者一覧

工程表

シノダケの採集と加工

採集	シノコガシ	シノサキ	ヒゲヘゲ	ヒゲ洗い
p.10	p.11	p.11	p.13	p.25

必要な材料
(一斗箕の場合)

ヒゲ
約 140 本

モウソウチクの採集と加工

採集	四つ割り	フシを落とす	縦に割る	整形
p.20	p.21	p.21	p.21	p.42

ウデギ
ソトダケと
ウチダケ各 1 本

ウラ

フジの採集と加工

採集	フジコガシ	フジタクリ	ズリカケ	フジヘゲ	フジコサエ
p.14	p.16	p.17	p.24	p.24	p.30

皮
芯

カラトリ p.18

カラヘゲ p.43

フジ
30 本 + α

カラ

イタミづくり p.27

ユミ張りフジの間にヒゲを通す

ユミ張りフジ 2 本

織り物の要領でヒゲの間にフジを通し、
アクド (立ち上がり部分) は網代編みにする
p.30 ~

フジ

アクド

仕立て p.44 ~

イタミを折り曲げて立体化し、
ウデギをカラで結いつける

ウチダケ

ソトダケ

カラ

サイドに出たヒゲをウデギに沿って
まとめ、カラで結う
p.48 ~

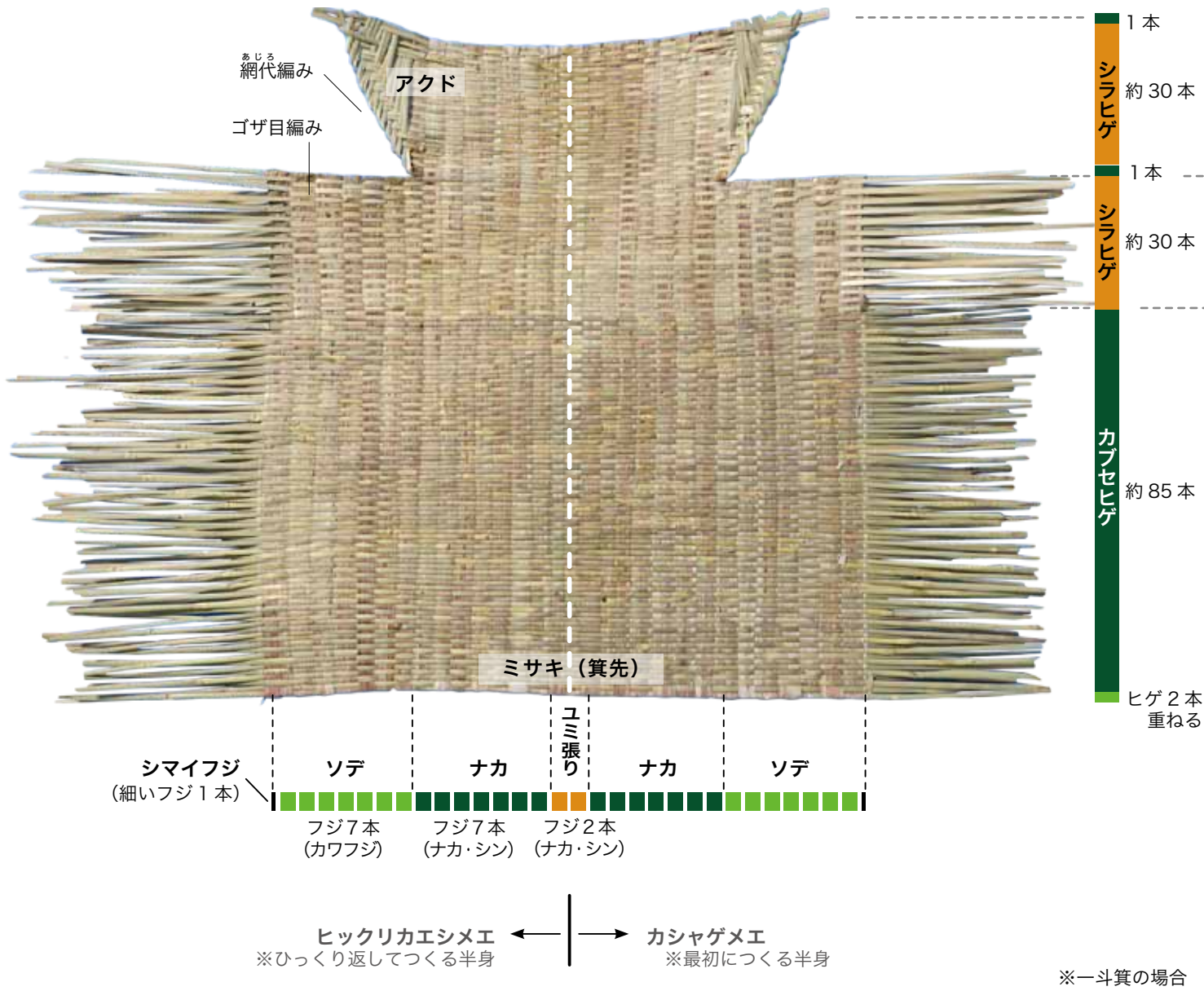
カラ

第1章

箕づくりの基本

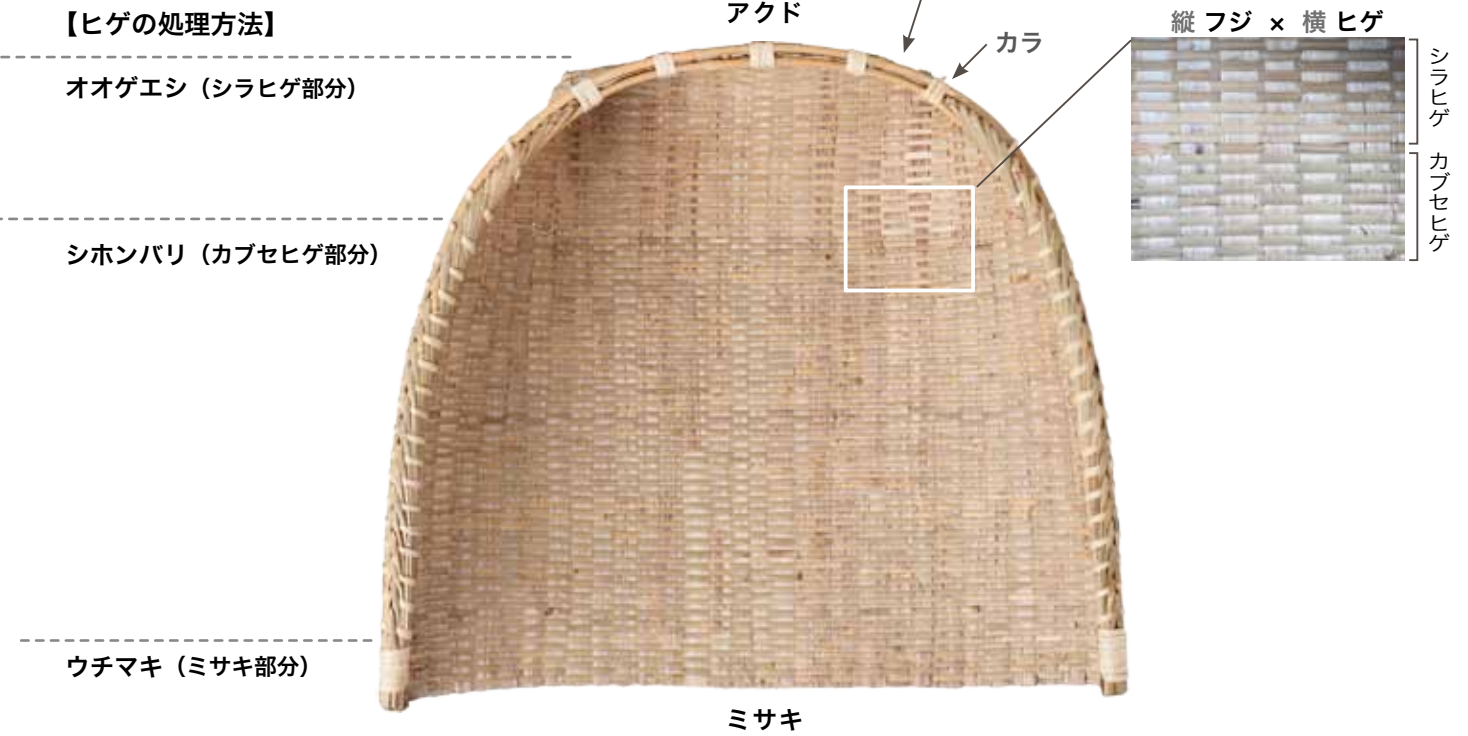
イタミ

フジとヒゲ（シノダケ）を編み組んでイタミ（板箕）をつくる



ミ

イタミを折り曲げ、カラで巻いて枠（ウデギ）に固定する



よい箕の条件

- ・隙間がなく、フジがまっすぐ通っている
- ・穀物を袋に入れるのに適度なコシの強さ

【ヒゲ】
シノダケ（アズマネザサ）の皮を剥いてつくる。材のおもて・裏、どちらの面を上に向けるかで同じ材を呼び分ける

▼ヒゲの断面

カブセヒゲ (皮側が上)

シラヒゲ (身側が上)

【フジ】
フジの皮を3～4枚に剥いてつくる。フジの層によって使い分ける

シンフジ (一番内側)

ナカフジ (シンフジとカワフジの間の1～2枚)

カワフジ (外皮側)

【カラ】
フジの芯から紐状に剥いてつくる

▼1本のフジの芯から最大3枚程とれる

▼拡大図

【ウデギ】 ソトダケとウチダケ

モウソウチクを割いて作る

外側（ソトダケ）と内側（ウチダケ）の2本があり、ソトダケに太い材を用いる

◀ソトダケだけ予め曲げ、カラで仮止めしておく

拡大図▶

基本の道具といろいろな箕 名称と用途

※各工程で使う主な道具を挙げています。「*」のあるものは p.6-7 で取りあげています

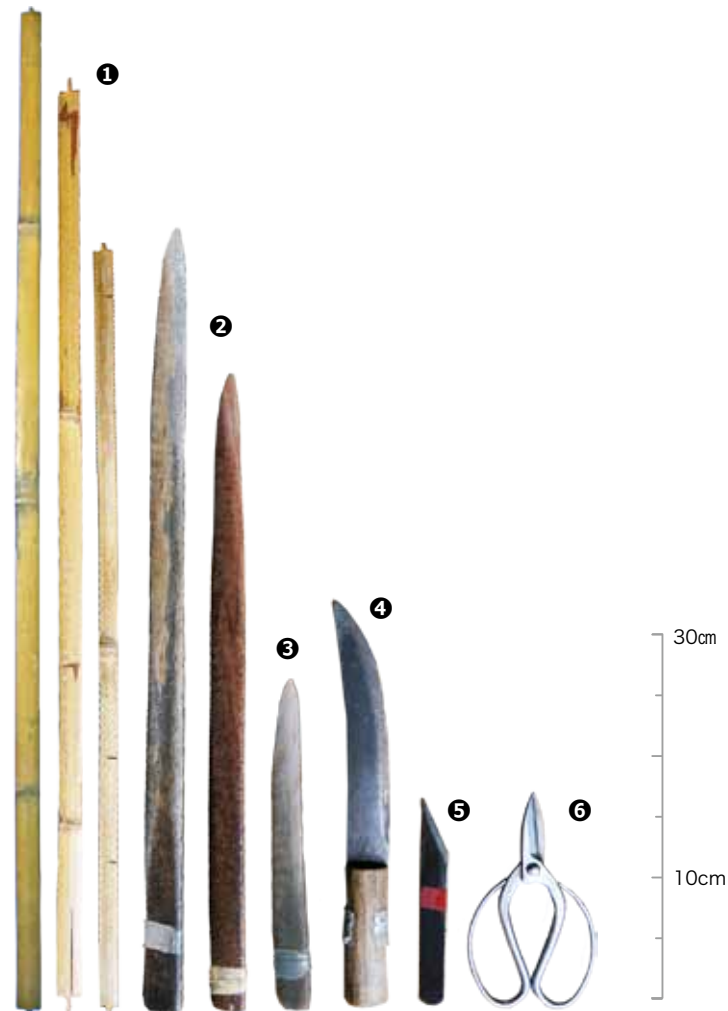
材料採集と加工のための道具 (図 1-1)

- ① シノサキ* シノコガシ、シノサキなどに用いる
- ② 箕づくり小刀* ヒゲヘゲ、フジヘゲ、カラヘゲなどに用いる。片刃の小刀。キリダシでも代用可能
- ③ キケズリ フジコガシ、フジタクリ、タケワリなどに用いる
- ④ ナタ シノダケの採集などに用いる
- ⑤ シノキリガマ シノダケの伐採に用いる
- ⑥⑦ ノコギリ シノダケやモウソウチクの伐採などに用いる
- ⑧ 鉄輪 モウソウチクを四等分するのに用いる。タケサキ、タケワリとも呼ぶ



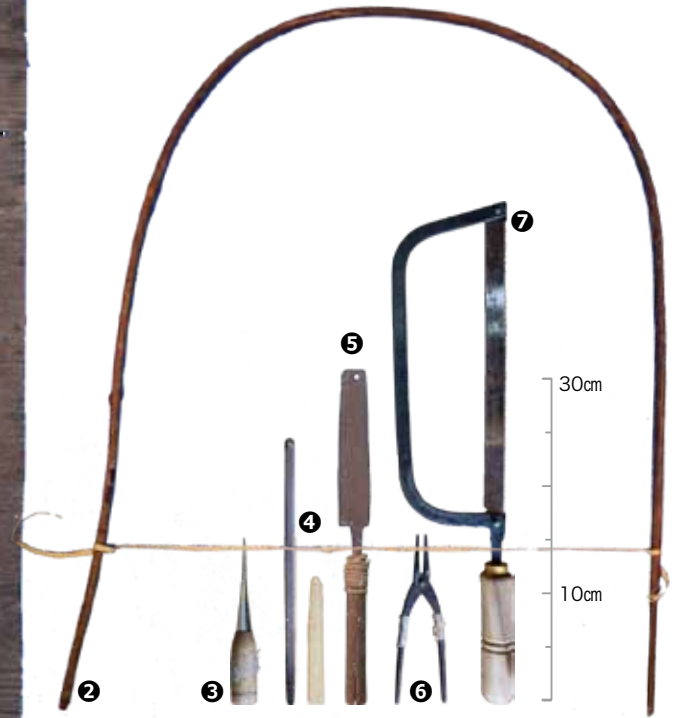
イタミづくりの道具 (図 1-2)

- ① ユミ* (3本) 左から一斗五升箕用、一斗箕用、五升箕用。イタミをつくり始める際、ユミにユミ張りフジ(中央の2本のフジ)を張り、イタミをつくり終えるまでつけておく。ユミの表面に刻まれた印で箕の縦のサイズをはかる。モウソウチク製
- ② キタチ* (キダチとも) フジをヒゲの間に押し込むのに用いる。また、キダチに刻まれた印で箕の横サイズをはかる。カシノキ製
- ③ コダチ キタチが減って小さくなったもの。ソデや細かい個所にフジを入れるのに使う
- ④ 箕づくり小刀 ヒゲの間にフジを押し込むのに使う。片刃の小刀
- ⑤ キリダシ 箕づくり小刀の代用として使用可
- ⑥ ハサミ ヒゲの端を切り揃える



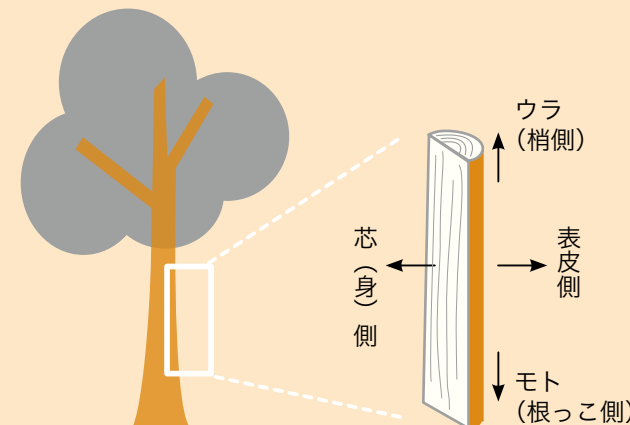
仕立ての道具 (図 1-3)

- ① イタ 仕立てをする際に下に敷く(仕立ては硬い床の上で行なった方がやりやすいため)。95×86cm
- ② キジュン ウデギのソトダケの大きさを示すもの。これにあわせてウデギを曲げる。ヨソドメ(ガマズミ)の木を曲げ、両端をフジのカラでとめる。高さ72×幅60cm
- ③ キリ ウデギにカラを巻く際、フジに穴をあけてカラを通すのに用いる、いわゆる目打ち。口を広げるため根元部分が太いのが特徴
- ④ ツバグシ* フジをヒゲの間に通すのに用いる。左は鉄製、右はタケ製
- ⑤ シメフジウチ* イタミの両端に入れたシマイフジを打ち込むのに用いる。薄刃で鋭利でない刃物なら何でもよい
- ⑥ ヤットコ ヒゲの間に通したフジを引っ張るのに用いる
- ⑦ ノコギリ ウデギの先端を切り揃えるのに用いる



はじめる前に

これだけは覚えておきたい



① 人によってやり方は違う!

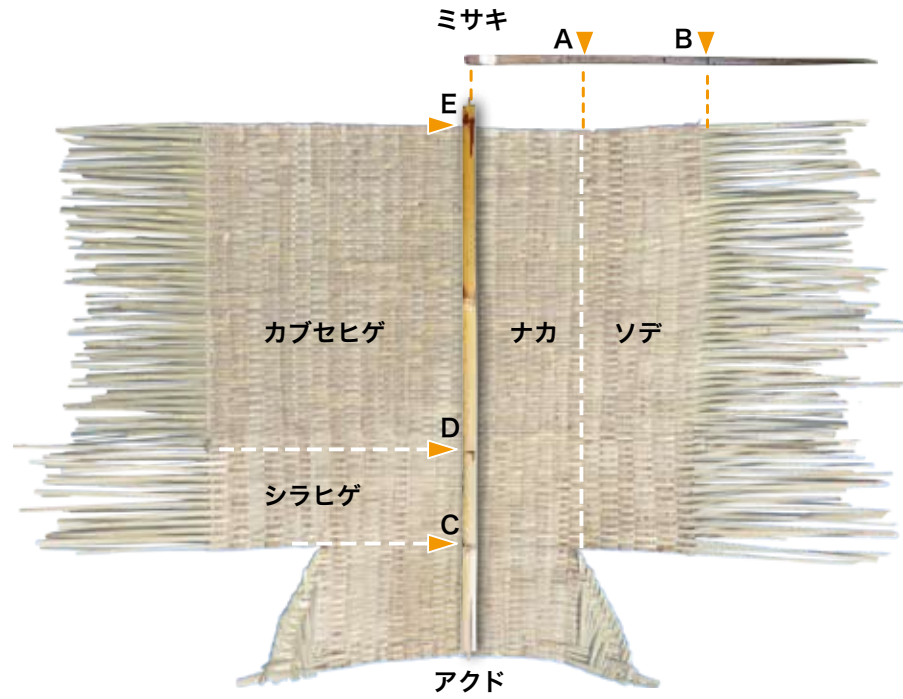
細かなやり方は人それぞれ
最終的に同じ形ができればよいので、
基本形を覚えたらいろいろ試行錯誤してみたい

② 材料の上下、おもて・裏はとても大切!

「木モト タケウラ」と言い、木は根元側から
タケは梢側から作業を行なうのが基本

ほとんどすべての作業において
モトとウラが重要になってくるので
材料は必ずモトウラ揃えておく

特徴的な道具



キタチとユミ (図 1-4)

キタチの背、ユミのおもて(皮側)には寸法を示した印が刻まれている。イタミをつくる際、この刻みを確認しながら寸法を合わせる

- 【キタチ】
 A ナカの幅
 B ソデとナカをあわせた幅
 ※ ▶は一斗箕、▷は五升箕

- 【ユミ】
 C アクドの高さ
 D シラヒゲとカブセヒゲの境
 E ミサキ

シノサキ (図 1-5)



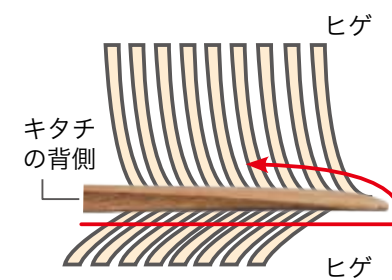
刃は厚めで、切れすぎない方がよい。シノサキ、シノコガシ、ヒゲヘゲなど多様に用いる

箕づくり小刀 (図 1-6)



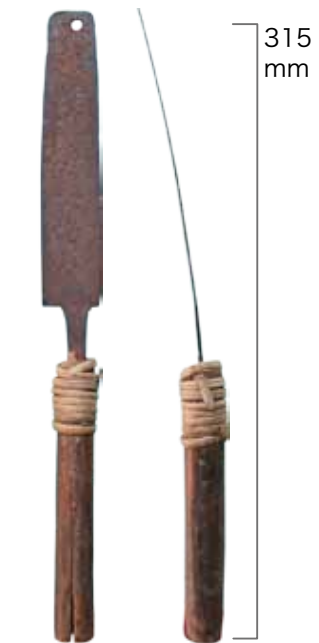
現在はキリダシを使う場面も、かつてはすべて箕づくり小刀1本で作業した。片刃で、★部分のみ刃が切れればよい

キタチ (部分、図 1-7)



◀ キタチの先端はゆるやかにカーブを描いている。ヒゲとヒゲの間にキタチを差し込み押し上げる際、このカーブを上にするるとヒゲが持ち上がる仕組み

シメフジウチ (図 1-8)



先端に向かってゆるやかにカーブを描くのが特徴。刃はなし。これはノコギリの刃を落として自作したもの

ツバグシ (図 1-9)



カラやフジを通すのに用いる。1本あると便利。タケ製もある

一斗箕

(図 1-10)



一斗箕

最もポピュラーな箕で一斗（18ℓ）の穀物が入るサイズ。フジがナカに7本ずつ、ソデに7本ずつ入る（※写真の箕はナガイが3ヶ所結ってあるが、通常の一斗箕は2ヶ所）



昔の一斗箕

(図 1-11)



ひとむかし前の一斗箕 ツノマキ、アカイタの箕

かつて最も需要があった箕。ウデギの処理にはウチマキとツノマキの2種があり、ツノマキはミサキより長くウデギが出ているのが特徴。明治・大正期まではツノマキが基本だったが、その後、ウチマキが作られるようになり、現在ではウチマキが主流。写真は古いタイプのツノマキの箕。飾りと補強のため、赤い染料で染めたフジ（アカイタ）を二重に織り込んでいる

民芸箕



五升箕



図 1-12 民芸箕と五升箕 五升箕（右）はフジがナカに5本ずつ、ソデに5本ずつ入る。小箕（こみ）とも呼ぶ。民芸箕は飾り用で、近年作られるようになった。様々なサイズがあり、写真はナカ・ソデ各3本のフジでつくられたもの

茶箕



図 1-13 茶箕 最も高価な箕。ヒゲ部分はカブセヒゲが主。カブセヒゲはシラヒゲに比べて仕立てにくいだが、より丈夫で内容物もよく転がる。ウデギにはヨソドメ（和名ガマズミ）を用い、トウ（籐）で巻く。一斗五升箕と二斗箕がある

第2章

材料の採集と加工

1. シノダケの採集

【採集時期】 10月～翌1月頃にかけて採集（図2-1）

タケから水が降りている冬場に採集する。夏に採ったシノダケは水分を多く含み、竹が柔らかく弱いため虫がつきやすい

【道具】 カマ、ナタ、ノコギリ

【採集量】 シノダケ約30～40本で箕1枚分

ヒゲにすると五升箕で約100本、一斗箕で約140本

【適材】 1年生のニイダケ（図2-3）、まっすぐで節が低いもの直径1～1.5cm程度で、4等分できる太さが最適（p.11 図2-6）。竹藪の中ではなく、藪の周囲にあって日や風がよく当たるものが性がよい

【手順】

① 伐採する

カマで根元の節のすぐ上を斜めに切り落とし（ひとつでも節を減らすため）、適当な長さ（120cm以上）で上方を切り落とす

※ 尖ったシノの先を足で踏み抜いて負傷するフミノキが最も怖いので要注意

② 切り揃える

モトを揃えてモト側から長さを測り、ウラ側をノコギリ等で切り揃える（図2-1）

【長さ】

一斗箕：握りこぶし12個分（約120cm）

五升箕：握りこぶし10個分（約100cm）

※その場で尺棒（長さの基準）を作ると便利

※ 根元の方が材の太さが均一のためモトから長さを測る
 ※ 長い材だと「ふた山取り」といって1本の竹から2本の材料が採れるが、ウラが細くなるため質は良くない。基本は「ひと山取り」とする



図2-1 シノダケの伐採

モトはカマで斜めに切り落とし、ウラは長さを測ってノコギリで切り揃えるため、モトのみが尖る。これでモトとウラの判別がしやすくなる



図2-2 シノダケの束（約100本）必ずモトとウラを揃える。かつては1把（200本）×14把＝1段（2,800本）＝箕60枚分とされた

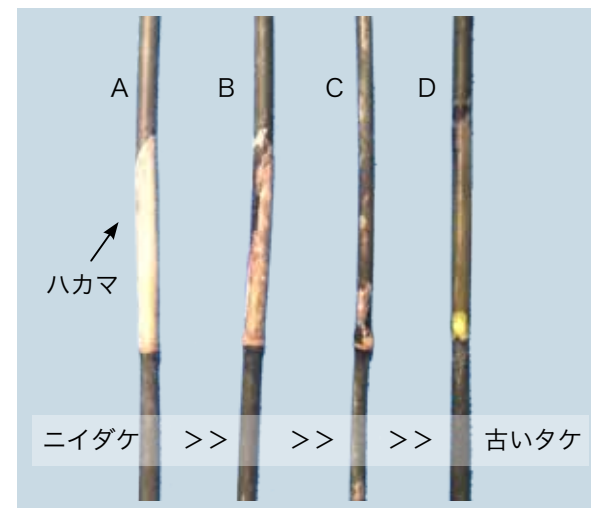


図2-3 ニイダケの見分けかた ニイダケ（A）はハカマがしっかりついており、汚れが少ない。また全体に白い粉が吹いている場合もある。古いタケは硬くて粘りがないため避けるが、2年生位（B）で汚れがひどくなければ使用しても問題ない

2. シノダケの加工

シノコガシからシノサキまでは一連の作業

(1) シノコガシ | シノのハカマを落とす

【作業時期】 シノを採集した後、すぐに行なう

【道具】 シノサキなど

薄くて切れにくい刃物なら何でも可

【手順】

左手に持ったシノを回しながら、右手の刃物を手前に引き、フシ部分のハカマ（甘皮）を削ぎ落とす。シノダケのモト側のハカマからウラのハカマに向かって作業する（図2-4）

※ この時、シノ本体を傷つけないように注意

※ 一番ウラ側の皮が落としにくい場合は、皮の根元にぐるりと切込みを入れてから落とすと楽にできる

(2) シノサキ | シノを4～6等分に割る

【道具】 シノサキ

【作業時期】 シノコガシをしたらすぐ

採集したシノは乾燥すると切り落としたウラの方から縦方向に割れてしまい、作業がやりづらくなるため。また、シノダケは湿気を嫌う。雨がかけると黄色く変色し劣化するので梅雨時期は特に注意が必要

【手順】

① 2ッ割りにする（図2-5）

シノサキを使ってシノを縦半分にする。この時、必ずシノのウラからシノサキを入れる

メがあるものは、メの部分が半分に分れるように割く（p.12 図2-7、2-8）

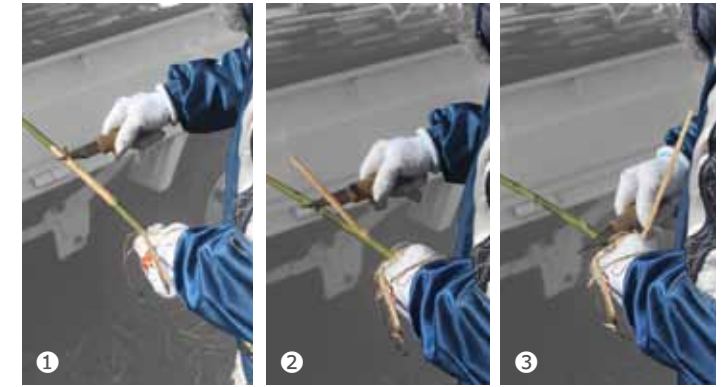


図2-4 シノコガシ



図2-5 シノサキ

左手で分岐点の部分をしっかり持ち、刃物が自分の方に入らないように制御する

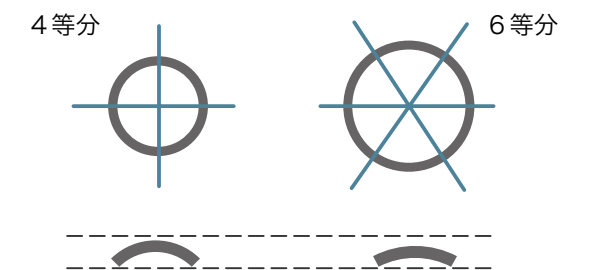


図2-6 4等分になると、6～8等分に比べて材がカマボコ状に反るため、箕の見栄えや穀物の転がりがよくなる

また、慣れてきたらモトから3cm程度は割らずに残しておき、次の②で2本一緒に割く

※シノサキは刃の根元に近い部分を使う。刃物が安定し、シノを割る際に厚さの調整がしやすいため

② さらに2～3つに縦に割く

2つ割りにしたものをさらに2～3つに割る厚さ（ヒゲの幅）が均等になるように、こまめに調整する（図2-9）

※最終的にヒゲが幅5～6mmになるよう、太さによって4ッ割りか6ッ割りかを判断する

③ シノ干し

天日でシン（竹の節）が白くなるまで干し、虫害やカビを防ぐ（図2-10）



図2-10 シノ干し

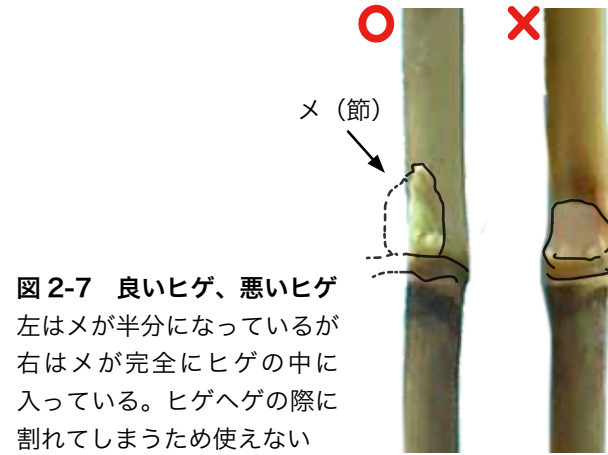


図2-7 良いヒゲ、悪いヒゲ
左はメが半分になっているが右はメが完全にヒゲの中に入っている。ヒゲへゲの際に割れてしまうため使えない

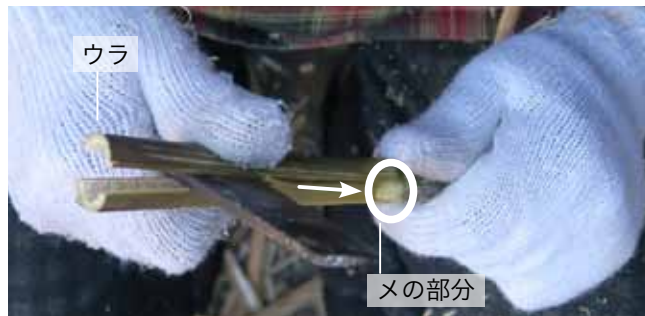


図2-8 メを割る
事前にメの位置を確認し、メが半分になるように刃物を入れる



図2-9 厚さの調整
厚い方の材を左手で押し、右手の刃物は手前に引き寄せる。この時、刃物（手首）は返さず、垂直に上下させる。手前が薄い場合は左手を手前に引っ張り、刃物を向うに押し出す

(3) ヒゲへゲ | ヒゲ（皮）を身から剥ぎとる

【作業時期】シノサキから1～2時間置いた後表面は乾いているが内側が濡れている位の状態がへげやすい

※乾燥したサキシノを使う場合は一晩水に浸けた後、バラッと広げて1時間位乾かす。ただし水に浸けると色が悪くなるため、できるだけ採集した日に行なう

【道具】シノサキ（もしくはある程度厚みのある刃物）

【手順】

① 表皮と身を分ける

サキシノのウラ側の身を上にし、3～4cm分を斜めにシノサキで削りとり、その部分を折るようにして表皮と身をわける（図2-13）

② 口やアゴを使ってへゲ

身側を口に咥え、左手で皮と身の分岐点を持ち、右手で皮を引っ張りながらへいでいく（図2-11）
最後はアゴと肩の間に身を挟んでへいでもよい
※どちらかの材が薄くなってきたら、厚い方の材を強めに引いて曲げることで厚さを調整する
※短いヒゲや薄手のヒゲはアクトの材に充てる

③ 乾燥させる

天日でシン（竹の節）が白くなるまでしっかり干し、虫害やカビを防ぐ
※ヒゲアライ（p.25）が終わっていないものは不用意に触ると手が切れるので要注意



図2-13 皮と身をわける
1本のサキシノから1本のヒゲが採れる



図2-11 ヒゲへゲ
両手に軍手、左手親指と人差指にはさらに布を巻く（ヒゲで手が切れるのを防ぐため）。材料はウラを手前にして左側に置き、身体の右側は開ける



図2-12 口やアゴを使わず刃物のみで割く人もいる



図2-14 ヒゲの断面
上図の赤い部分が、左図のヒゲになる。幅約5～6mm、厚さ1mm弱にへゲ

1. フジの採集

【採集時期】 11月～2月頃までに採集

フジから水が降りている冬場に採集する。夏場も採集可能だが、夏フジは硬いため、フジヘゲ (p.24) がしにくい

【道具】 カマ、ノコギリなど

【採集量】

ベテランの腕で、生のフジ 16貫 (60kg) = ウナンカワ 3貫 (11.25kg) = 箕 50枚分といわれた
ただし、カラは適材が少ないため、カラの採集にさらにフジが必要になることがある

【適材】 5～6年生のフジ

太さ 2cm 程度が最も使いやすい。長さは 1m 以上
下記のような質のフジを選ぶ (p.15)

- ・ 曲がりやねじれが少なく、まっすぐなもの
- ・ 粘りがあり、柔らかいもの
- ・ 節（アリワタリ）がないもの
- ・ フタツカワ (図 2-20～2-22) でないもの

【手順】

① 採集する

フジをたぐって、できる限り上方をカマで切り、次にフジの根元部分を切る

- ※ 一度採集したら、次に採集できるようになるまで5年位は山を荒らしておく（間をあける）必要がある
- ※ タネになる木（親木）がある近くにはよいフジがあるので、タネ木を探す

② フジを埋める穴を掘る

スコップやクワでフジが埋まる位の深さの穴を掘る

③ フジを埋める (図 2-16)

採集したフジを束ね、水かける
防腐のため春彼岸過ぎまで地中に埋めておく

- ※ 先端が入らない場合は、先端を折り曲げて入れる

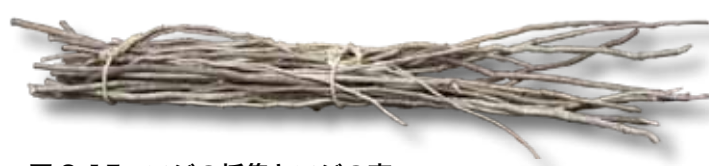
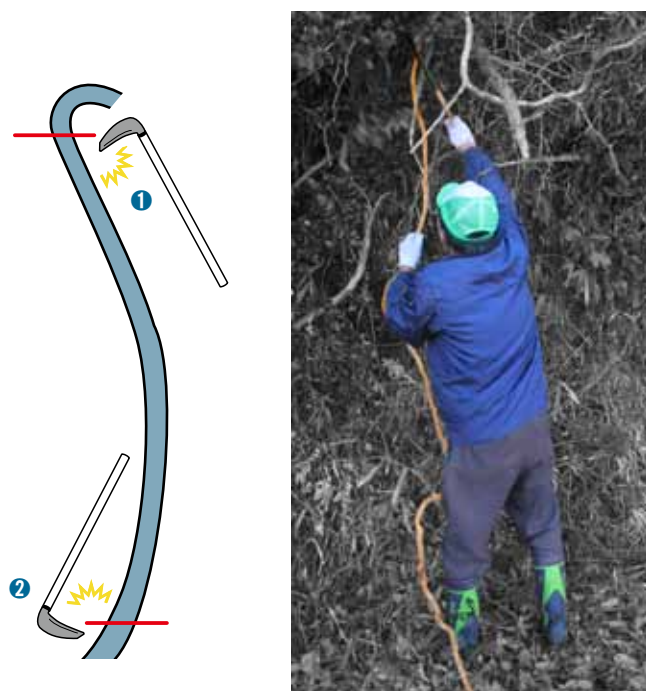


図 2-15 フジの採集とフジの束

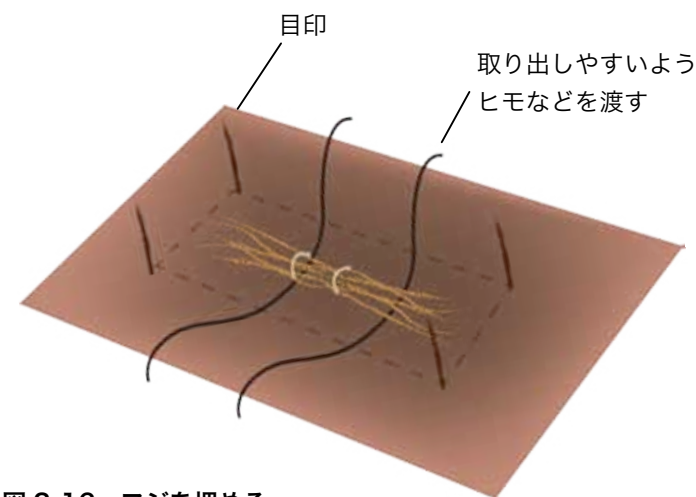


図 2-16 フジを埋める

空気が入らないように土をしっかりとかけ、踏んで押し固める。埋めた目印に棒などを立てる。雨が少ない天気が続く場合は時々水かける

質のよいフジ・悪いフジ



図 2-17 質のよいフジ



図 2-18 質の悪いフジ

質のよいフジ

- ・ 横筋が入っているもの
- ・ 皮が赤味があったもの
- ・ スギやマツなど柔らかい木に懸ったもの
※ ジョウキ（ナラ、クリ等の雑木）に懸るものは硬い

質の悪いフジ

- ・ ねじれや大きな節があるもの
- ・ アリワタリ、フタツカワのもの
※ ネフジ（地面を這うフジ）にはフタツカワが多く、質がよくない
※ 樹皮がガビガビなものはダメ

フタツカワ 外皮が二重になり、木の芯まで皮が食い込んでいる状態を呼び、剥ぐのに手間がかかるので使えない。「キガノル」ともいう。幹がミミズ腫れのように外見からある程度判別できる (図 2-21)。また、外皮を少し削ぎ取ってみて、図 2-22 の矢印部分のように、ピンクの肌の上に白い皮が乗っているものはダメ

アリワタリ 節のように皮が硬くなった部分。気候が暖かいと大きなアリワタリができ、カワフジにした時にフジに穴が開くので使えない

小口による見分け 図 2-20A は質のよいフジ。芯のまわりにピンク色の皮が見られる。図 2-20B は矢印部分が節になって膨らんでいるので使えない。図 2-20C は矢印部分に白い木質部がのっており（フタツカワ）使えない

図 2-19 間違えやすい植物

曲げてみて外皮に亀裂が入るのはアケビ

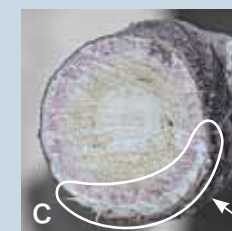
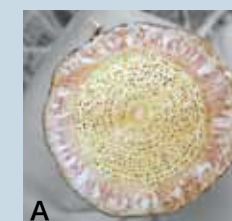


図 2-20



図 2-21



図 2-22

2. フジの加工

(1) フジコガシ | フジの表皮を削ぎ落とす

【作業時期】遅くとも5月初旬までに終わらせる
時期が遅れるとフジが腐ってしまうため。また天気が悪い日はフジのツヤが悪くなるので作業は行なわない

【道具】シノサキなど

刃物は何でもよいが、切れすぎるものはカワをいためてしまうので、切れないものがよい

【手順】

① 土の中から掘り起こす

掘り起こして土を払う（洗う必要はなし）

② フジを選別する

フジがあるものは使えないので、フジを削ぎ落とすか、その部分を切り落とす。長さは3尺～3尺2寸（90-100cm）あればよい（五升箕～一斗箕の場合）
曲がっているフジはねじってまっすぐにする

③ フジコガシを行なう

伸ばした右足にフジのウラ側を挟み、右手に持った刃物でモト側からフジの表皮を削ぎ取る（図2-23）
特にフシの部分は念入りにフジコガシをする
手元（一番モト側）の部分はフジを逆に持ち替え、刃物を向う側に押し出すように削り、外皮が残らないようにする（図2-24）

※力を入れすぎると必要な部分まで削ってしまうので要注意。白い面を通りこしてピンクがかった面が出てきたらコガシすぎ（図2-25）

※ フタツカワのフジ（p.15）でも、芯（材の中心部）にまでキが乗っていなければ大丈夫だが、どれだけ削っても白い面のものは使えない

図2-25 フジコガシすぎたフジ
ピンクの面が出てきたらコガシすぎ



図2-23 フジコガシ



図2-24 手元（一番モト側）の部分はフジを持ち替え、膝を台にして刃物を向う側に押し出すように削る



(2) フジタクリ | フジの皮と芯を分ける

【作業時期】フジコガシ後、1～2時間おいた後
芯が多少乾き、かつまだ水分が残っている状態がタクリやすい

【道具】キリダシ

【手順】

① 芯と皮を分ける

ウラ側にキリダシなどで縦に切れ目を入れ、手前に折り曲げて皮を芯から剥がす（図2-26上）

※芯が皮から離れない場合は、その部分を刃物の柄などで何度か叩き、柔らかくする

② 皮をタクル（図2-27）

芯を右手で手前に引きながら、左手に持った皮と分離していく（タクル）

この時、材がねじれないように、1回タクルごとに皮の裂け目部分に刃物で切込みを入れる（図2-26下）

※フジの繊維に従ってタクルとねじれてしまうため、繊維に逆らってまっすぐになるように、キリダシでメ（誘導のための切込み）を入れる。皮の裂け目部分が繊維状になるので、皮を切らないように注意しながら、繊維のみを切っていく

※ 芯が手前に引けなくなった場合には、無理に引かず、こまめにキリダシで縦方向に切込みを入れる

左手に持ったフジの皮ができるだけ折れ曲がらないように、またフジの芯を傷つけないよう（芯からカラを採るため）心掛ける

切り離した芯のうち、カラ（ウデギを結いつける紐状のフジ）が採れそうなものは分けてとっておく

切り離した皮は、ウナンカワと呼ぶ（図2-28）

※ウナギの皮に似ているからウナンカワとの説

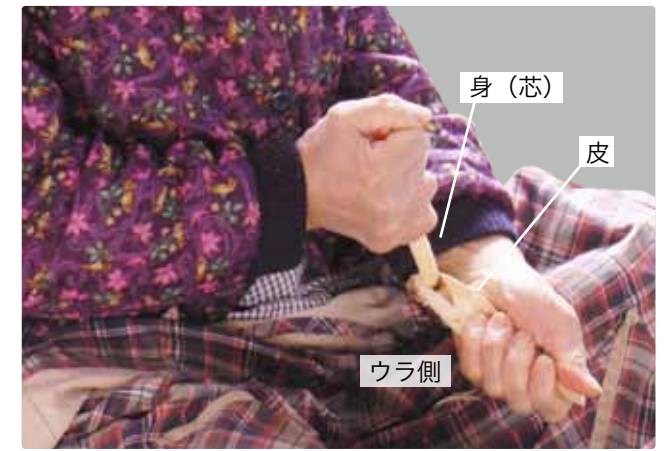


図2-26 (上) フジタクリ

右手に持った芯を手前に引き、皮から引き剥がす。芯が出てきたら、右足で皮を押さえてタクル

(下) 切込みを入れる 皮の部分を切らないように、繊維質のスジが出てきたところだけを丁寧に切る



図2-27
皮と身を分ける



図2-28
ウナンカワ

- ③ ウナンカワの長さを測って束ねる (図 2-29)
 モト側を基準に皮の長さを揃え (約 90~100cm)、ウラ側の長すぎる部分は外皮を外側にして折り曲げる
 折り曲げた部分 (ウラ側) に畳針でひもを通し、束ねる
 ※束が広がらないようにするため、両端のウナンカワは折り目部分を内側に向けて止める

- ④ 乾燥させる (p.17 図 28)
 カビを生やさないよう、真っ白になるまで干す



図 2-29 ウナンカワを束ねる

(3) カラトリ | フジの芯からカラをとる

【作業時期】 フジタクリ後、2~3 時間おいた後
 2~3 時間おいたほうがアウェイがよくなる
 (=フワフワとして塩梅がよくなる)
 材の内部が湿っているうちに行なう

【手順】

- ① フジの芯を選ぶ
 芯を折り曲げてみてヒビ割れができるもの、強く引っ張って切れるものは使えない
 ※ 比較的細いものの方が良質な場合が多いが、よいカラが採れる材は少ない
 ※ よいカラの条件は、そこそこの厚みがあり、厚さが均一であること、引っ張りに強いこと。よいカラは自然にクルクルと丸まる (図 2-33)

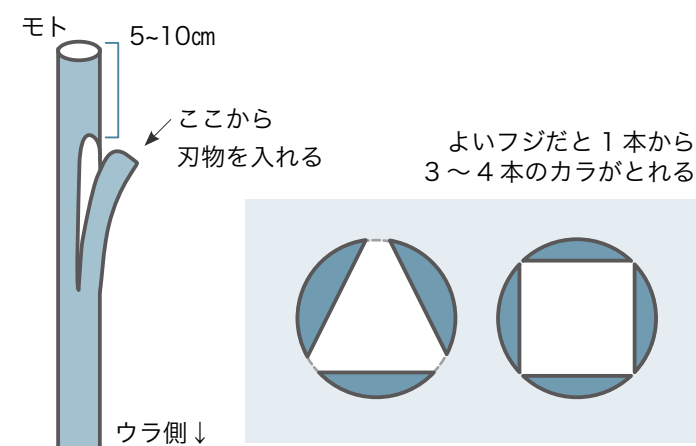


図 2-30 カラトリ



図 2-31 カラトリ

芯の先 (モト) は足袋や軍手をはめた右足に挟む

- ② カラをとる (図 2-31、32)
 キリダシでモトから 5~10 cm 位下側に切込みを入れ、右手でカラを引きながらウラに向かって剥がす。左手は分岐点の少し下を持ち、芯を押し上げるように曲げることで厚さを調整する

※右手を強く引きすぎると芯の部分まで引っ張ってしまうので、左手で押し上げるようにしながら引くのがコツ

この時、フジの繊維に沿って剥がすので、材がねじれている場合は材をねじりながら剥ぐ

幅は 1 cm 強になる

- ③ 乾燥させる
 ひとつにまとめて括り、よく干す (図 2-34)



図 2-32 カラが弧を描くようにとっていくのがコツ

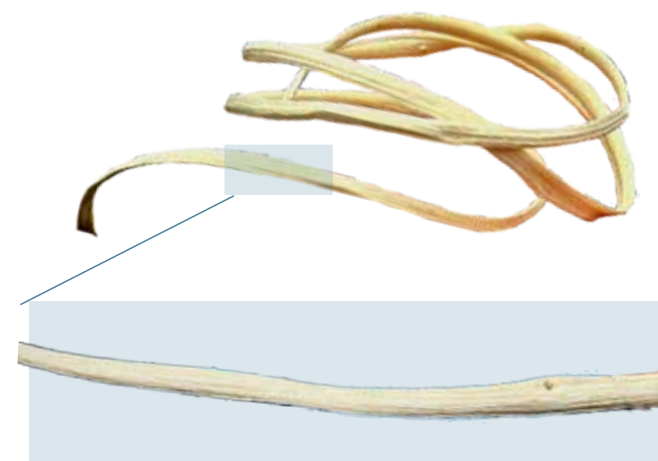


図 2-33 質のよいカラは自然にくるくと丸まる



図 2-34 カラを丸める

かつては、ひとマルキ (丸めた束) で箕 10 枚分のカラとなるようにまとめた

【採集時期】 11月頃

タケに水分があがらない時期。タケが水を吸い上げる
3月以降は材が弱く、虫がつきやすいため

【道具】 ナタ、キケズリ、鉄輪、ノコギリ

【採集量】 1本の竹で20～30枚分のウデギに

一斗箕で「一尋^{ひら}+ひと握り」の長さ(約1.8m)が必要。
1本の竹から材が2～3玉採れ、ひとつの玉から12～20本の材ができる(図2-36)

※「一尋^{ひら}」は両手を広げた時の、指先から指先までの長さを指す単位

【適材】 3年生のモウソウチク

直径10～15cm。まっすぐな質でフシ間が長いものを選ぶ。ウラ側の細い部分をウチダケ(内側のウデギ)に、モト側の太い部分をソトダケ(外側のウデギ、トダケとも)に用いる

【手順】

① タケを伐採する(図2-36)

根元を地面すれすれのところで切り、モト部分2～3尺(60-90cm)を切り落とし、ナタで枝を払う

※ タケのモト部分は肉が厚く、曲がっているため使えない

② 玉切りにする

尺棒で長さを測り、ノコギリで玉切りにする(同じ長さに切り揃える)

※ 玉切りしたタケのうち、ウラ側のより細い部分はウチダケに、モト側のより太い部分はソトダケにする

※ 尺棒は一斗箕で約1.8m(一尋^{ひら}とこぶし1～2コ分)。小箕(五升箕)の場合は一尋程度で十分



図2-35 モウソウチク
マダケより皮が厚手で硬い。1年生のニイダケは粘りがないので3年生を使う

図2-36 適材
根元部分と一番ウラ(梢側)は使用しない



図2-37a 四ッ割り
鉄輪で四ッ割りにする
かつては鉈で割っていた

③ 四ッ割りにする

斜めにしたタケのウラ側に鉄輪を当て、モト側を石などの堅いものに叩きつける(図2-37a)

ある程度鉄輪が入ったら、タケをまっすぐに立て、地面に置いた板などに叩き付けながら鉄輪を下げ、四ッ割にする(図2-37b)

④ フシを落とす

タケ内部のフシをキケズリでひとつずつ削って落とす

⑤ 3～4本に割る

四ッ割にしたタケを、キケズリでさらに3～4つに割る。割る際には、まずウラ側に等間隔で2～3カ所切込みを入れ(図2-39)、後は小脇を抱えてキケズリを手前に引くように入れていく(図2-38)。この際、メを半分にするように刃物を入れる

※ タケに負けないよう、まっすぐにキケズリを入れる
※ 節の部分は硬いため、手首を返しながらかきズリを左右に振り、節を通過する

⑥ 乾燥させる

タケはカビやすいので、水に濡らさないよう天候を見ながら、天日で1～2ヶ月干す



図2-39
ウラ側に切込みを入れて竹を割る

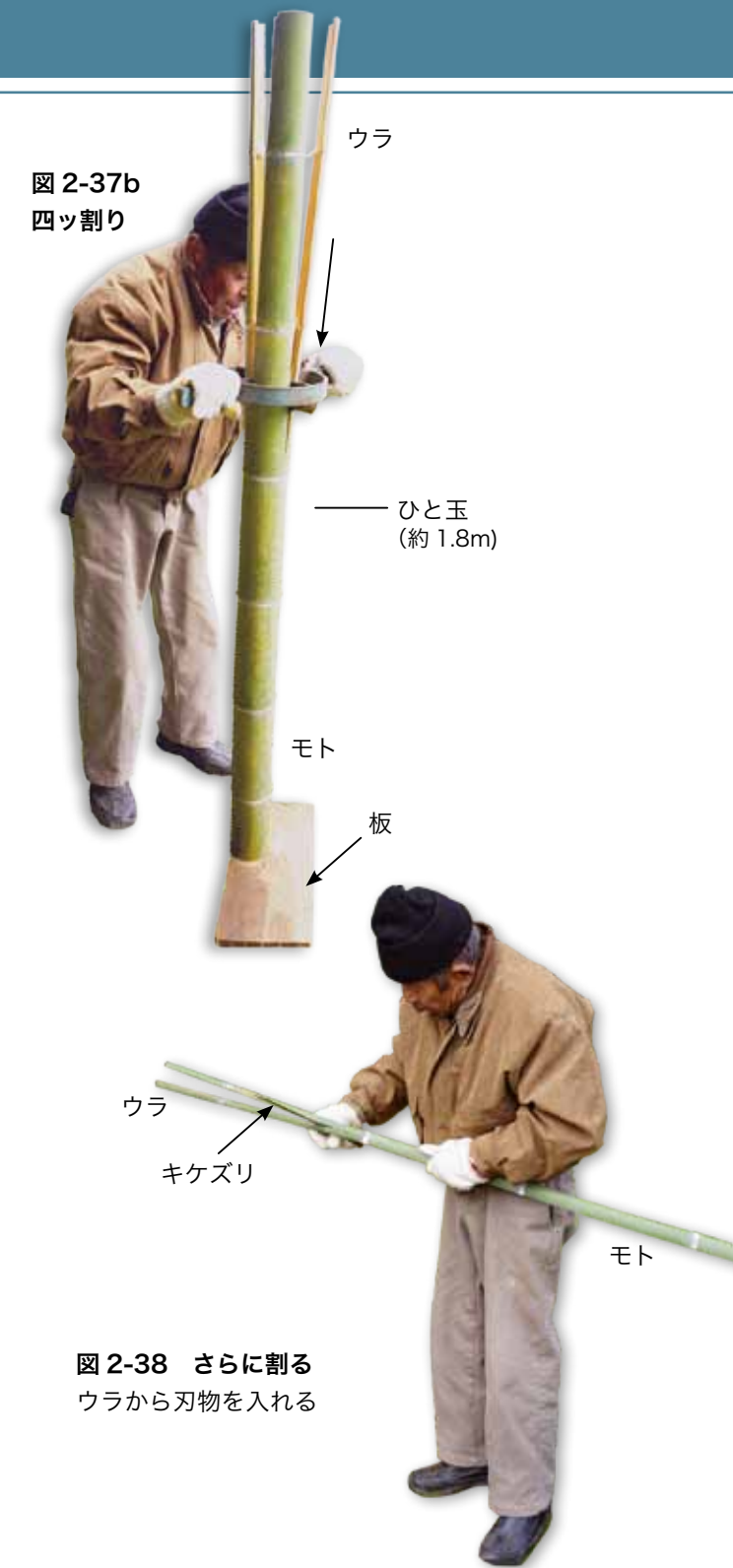


図2-37b
四ッ割り

図2-38 さらに割る
ウラから刃物を入れる

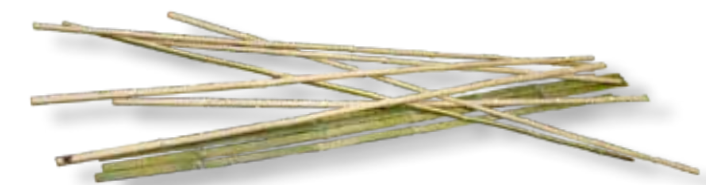


図2-40 ウデギ用に小割りにしたタケ
1本のタケから20～30枚分の材が採集できる(ソトダケとウチダケあわせて40～60本)

第3章

イタミづくり

1. フジを整える

(1) ズリカケ | ウナンカワをしごいて平らにする

- ① ウナンカワ（フジの皮）を水に浸ける
乾燥させておいたウナンカワを一晩水に浸ける（ヒヤス）
- ② ズリカケをする（皮を平らにする）（図3-1）
干す時に折り曲げた部分（ウラ側）の皮を広げ、外皮側を金具に押し当てて皮の端を引き、強く擦る
最初、ウラだけを数回ズリカケし、続いて全体をズリカケする
最後の仕上げにモト部分をズリカケする
※ズリカケは、皮を平らにしたり、反りをとるために行なう



図3-1 ズリカケ
金具はシノサキの刃などのすり減ったものを用い、柱などに刃を上にして取り付ける

③ フジを丸める

ズリカケが終わったウナンカワを平らな状態に保つため、フジをウラから丸めていき、ひとつの玉にする（図3-2）。この時、フジの芯側が外にくるように丸める
→ 丸めた後、10分位おいて次の作業へ



図3-2 フジを丸める
フジ皮の芯側が外に出ている状態で、ウナンカワをひとつの玉にまとめる。写真は2〜3枚をまとめているが、20枚位を一緒にまとめてもよい

(2) フジヘゲ | ウナンカワを3〜4枚の層にヘゲ

① ウナンカワを3〜4枚に剥ぐ

フジのモト側の芯（身）側を左手の人差し指に巻き付け、外皮側にキリダシを入れ、そこを起点に両手でそれぞれの皮を引っ張る（図3-4、3-5）
皮が薄くなってきたらその都度刃物を少しずつ入れ、薄くなったほうに足して厚さを調整する
2枚目以降も、1枚目と同じ場所に刃物を入れてヘゲ

フジの端（ウラ側）は切り離さずつなげておく（図3-3）

1枚のウナンカワから、2〜4枚のフジが採れる。
それぞれ用途ごとに使い分ける（図3-3）



図3-3 剥いだフジ

外皮側：カワフジ
真ん中：ナカフジ ※1〜2枚
芯側：シンフジ（シンツキとも呼ぶ）

② 乾燥させる

地面に広げて干す
ある程度乾いたら、切り離さないでおいた部分を支点に吊るして保存し、次回使う前に水に浸けて戻す

2. ヒゲを整える

(1) ヒゲアライ | ヒゲの角や汚れをとる

① ヒゲを束ねる

当日使うだけのヒゲ（一斗箕1枚で余裕をみて約200本）をまとめ、紐で3か所を緩めに結ぶ
※紐を緩めに結ぶのは遊びをつくるため。ムラなくヒゲの角をとるには遊びが重要

② ヒゲを揉む（図3-6）

手を濡らし（ヒゲは濡らさない）、ソシ（けば立ち、ソウシとも）が出なくなるまで2〜3分程、板の上で転がす
ソシが大体取れたらヒゲをさっと水に濡らし、10〜15分板の上で転がす
※力を入れると割れるのでやさしく転がす。手を少しずつずらしたり、時々ひっくり返したりして、全体をまんべんなく転がす

手でヒゲの両端を触り、角がとれているのが確認できるまで続ける

③ 流水で汚れを洗い流し、ヒゲを干す

図3-6 ヒゲアライ
水に濡らすのは最初に1回、途中で1回程度でよい
角がおおよそ取れたら、ツヤを出すために洗剤や洗濯の残り水をかける場合もある



図3-4 フジヘゲ 刃物は幅広く入れるとフジが切れてしまうので、キリダシの刃先で薄く、少しずつ入れる

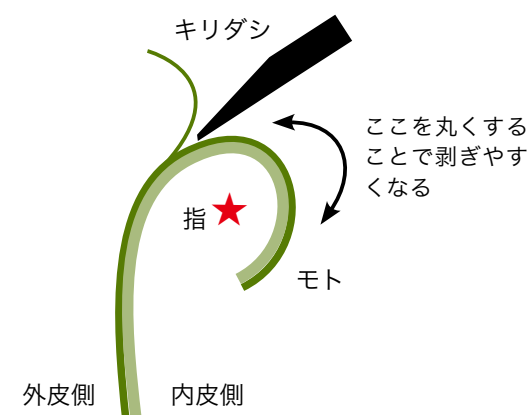


図3-5 ★印のところに左手の人差し指を入れ、皮の表面を丸くすることで皮を剥ぎやすくする



(2) ヒゲ選び | 用途別にヒゲを選別する

- ① コシの弱いもの、短いものを取り除く
ヒゲの束の上部を片手で掲げ持ち、軽く叩きながら振り、落ちたもの(=短いもの)を除く(図3-7)
その後、1本1本手で触って確認し、薄すぎるもの、メの範囲が広いもの、黄色く変色しているものを除く
※ヒゲの束のモト側を持ってしならせ、しなりが強いものを外す方法(通称ヤナギ)もあるが、この方法では根元部分のしなり具合しかわからないため、手で触って、ヒゲの中央部分が柔らかいものをはじく方が効率が良い



図3-7 ヒゲ選び

- ② 適材を選ぶ
丁寧に材を選別する
きれいなヒゲはカブセヒゲに、①ではじいた質が悪いヒゲ、短いヒゲはアクト(シラヒゲ)に用いる
※できあがりの良し悪しは材料で決まるため、丁寧に選ぶ
※ヒゲ選びをした後に「軽く一握りで、箕1枚分ある」のが理想。一斗箕で140本前後になる

3. ユミ張りヒゲ通し

(1) ユミ張り | ユミにフジを張る

- ① ユミ張り用のフジを2本つくる
ユミ張りフジは質の良いナカフジかシンフジを使う
ナカに入れるフジより細め(2cm位)にフジコサエ(p.30)し、長さはユミより各端2~3cm長くする
※ユミ張りフジを細めにするのは、イタミのナカ部分に幅広のフジをもってくるため

- ② ユミにフジを張る
ユミのおもて(皮側)を上にして置く
ユミ張り用のフジの両端を、1:2の幅になるように裂き、図3-9のように2本を絡ませ、まずユミのミサキ

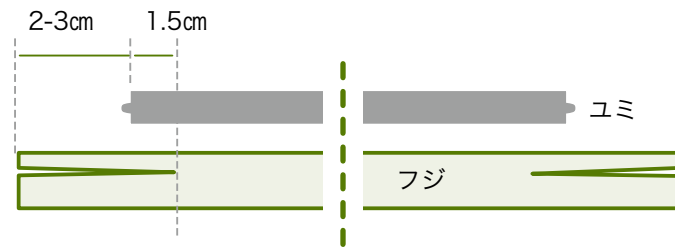


図3-8 ユミにフジを張る
フジはユミの両端より各2-3cm長くし、切込みはユミの端より1.5cmほど深くする



図3-9
フジの先端を1:2に裂き、細い方の端同士を絡ませる

- 側の突起に引っかける
ユミを手前にしならせ、フジを適度に張りながら、アクト側の突起にもフジを引っ掛ける(図3-10)
※ユミのアクト側/ミサキ側の区別は p.6 参照
※ミサキ側にフジの質の良い部分をもってくる
※ナカフジの場合は、よりきれいな芯側を上向きに、シンフジの場合は外皮側を上向きにする(シンフジの芯側は水に塗れるとヌルヌルになり、箕にした時に穀物類が転がりにくくなるため)
※ユミはイタミをつくり終えるまで外さない

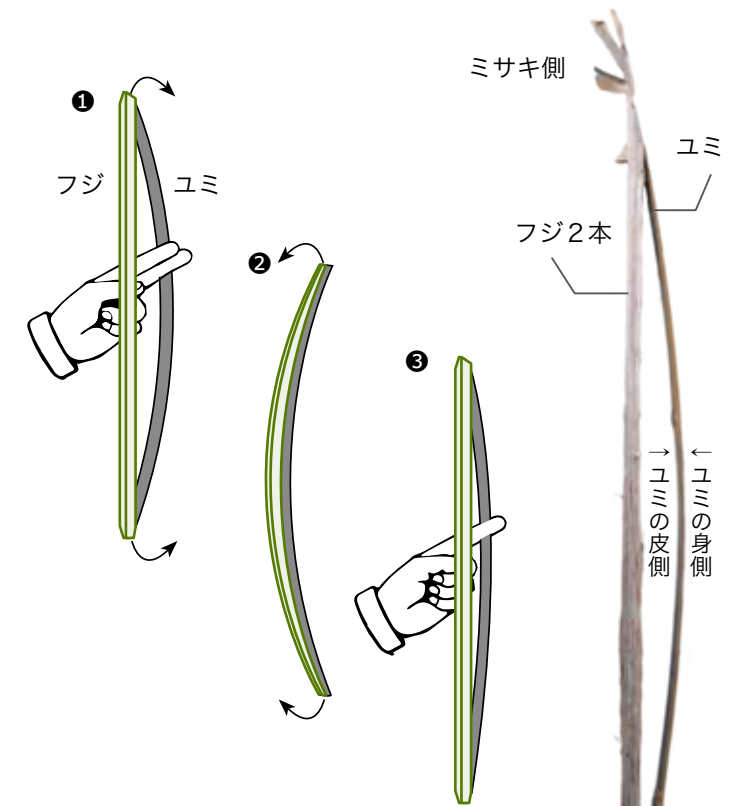


図3-10 ユミ張りフジを張ったユミ
最初にユミとフジの間に指2本入る位に張る。ユミを一度反対側に反らせると、ユミとフジの間隔が狭まる。その時、隙間が指1本分程度になるのが適度な張り具合

(2) ヒゲ通し | ユミにヒゲを通す

- ① ヒゲを水に浸ける(ヒヤス)
ヒゲが乾いている場合は10分程水につけて湿らせる
※ヒゲを柔らかくし、折れを防ぐため
- ② ヒゲの束の半分をユミの間に通す
(図3-11、p.28 図3-12)
アクト側を手前にしてユミを床に置く
ヒゲ選びではじいたヒゲの束(アクト用にする)を2束にわけ、そのうち1束を、ユミ張りフジの間にウラから通しておく。この時、ヒゲの束は向かって右のフジの下を通し、左のフジの上に出す(図3-12の黒いヒゲ)残りの半束は、先ほどの半束とウラ・モトを逆にして、自分の右側に置いておく

- ③ 押さえヒゲを入れる(アヤをとる)
②で通しておいたヒゲの束の上に、束に対して直角になるようにヒゲを1本置き、アヤをとる(p.28 図3-12の赤いヒゲ)。押さえヒゲは身側を上(皮を下)にする
※このヒゲを入れないと通したヒゲがバラバラになる。最初につくる半身(カシャゲメエ)側に入れる
※身側を上にするのはヒゲが滑らないようにするため

- ④ ヒゲを通す(図3-12)
ヒゲは、②で挟んでおいた束(右手側がモト)と、手元に残した束(左手側にモトがくるように挟む)を交互に挟むことで、ヒゲのモトとウラが交互になるようにする
※ヒゲを挟む時には左足でユミのアクト側の端を押さえしておく



図3-11 ヒゲ通し
アクト用のヒゲ、最初に半分をユミへ挟んでおく
ユミの下に何かを挟み、高くしておくと作業しやすい

最初の1本は②でフジの間に差し込んでおいた束の中から1本を手前におろし、カブセヒゲ(皮が上)とする

2本目は手元にとっておいたヒゲを、ヒゲのモト側から通し、シラヒゲ(皮が下)とする。通し方は最初のヒゲと逆で、右のユミ張りフジの上を通し、左のユミ張りフジの下に出し、押さえヒゲの上に出す

※この部分はアクドになるので、ヒゲ選びで選んだ短いヒゲや柔らかいヒゲを入れる

アクド部分のヒゲを通し終わったら、ヒゲ選びで選んだ質のよいヒゲを同様の方法で通す

この時、挟んだヒゲの束の中央がちょうどユミに当たるように調整する(ヒゲを1本とってユミの両端に出たヒゲの長さを測るとよい)

ユミの印に合わせ、図3-15の通り、シラヒゲとカブセヒゲを用いてヒゲを通す(p.6も参照)

※ヒゲを通す際、ユミ張りした2本のフジの間がちょうどヒゲ1本分空くようにする(図3-13)

※ヒゲの本数は決まっているわけではなく、ユミに刻んだ印ではかる

⑤ ヒゲをツメル

残り数本を残したところで全体のヒゲの間隔を詰める。この時、全体のバランスを見て、薄いヒゲなどは引き抜いて交換する

⑥ ミサキのヒゲを通す

最後の2~3本は硬めのヒゲを通す
また一番ミサキのヒゲは薄めのものを2本、皮が外になるように腹合わせに重ねて通す

※最後の二重にするヒゲは厚めのものを入れるとミサキの柔軟性が失われるため、薄いものを選ぶ

⑦ 仕上げ

押さえヒゲをユミ側にぎゅっと近づけ、噛み合わせを締める。キタチの先でカシャゲメエのヒゲを全体にぎゅっと撫で、ヒゲが広がるように馴らす

※ヒゲを撫でて広げるのはカシャゲメエのみ。カシャゲメエを先につくる関係で、どうしてもフジを挟んだ時にすぼんでいく傾向がある。このため、カシャゲメエが少し末広がりに仕上がっているくらいがちょうどよい

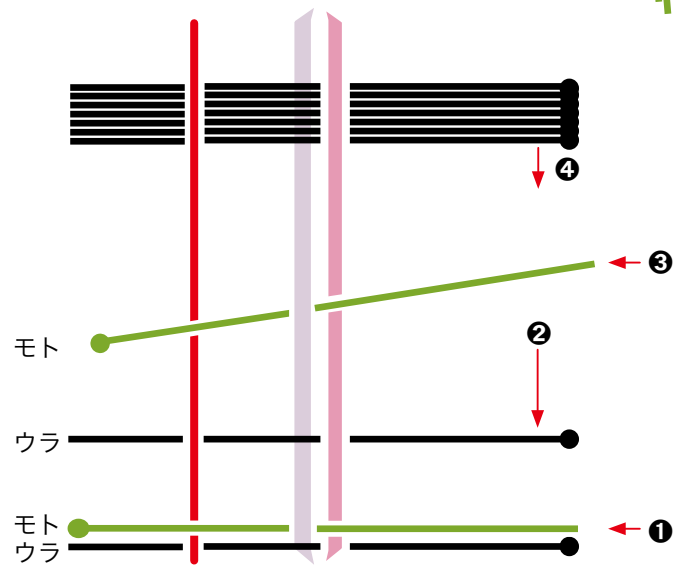
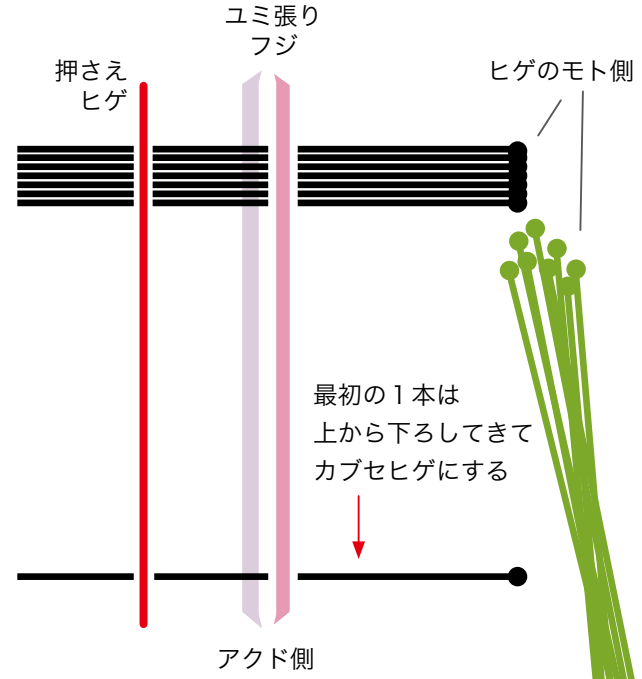


図3-12 ヒゲ通しの構造
①横から ②上から ③横から ④上から と交互に通す



図3-13 ユミ張りフジの間をヒゲ1本分空ける



図3-14 ヒゲ通し完成

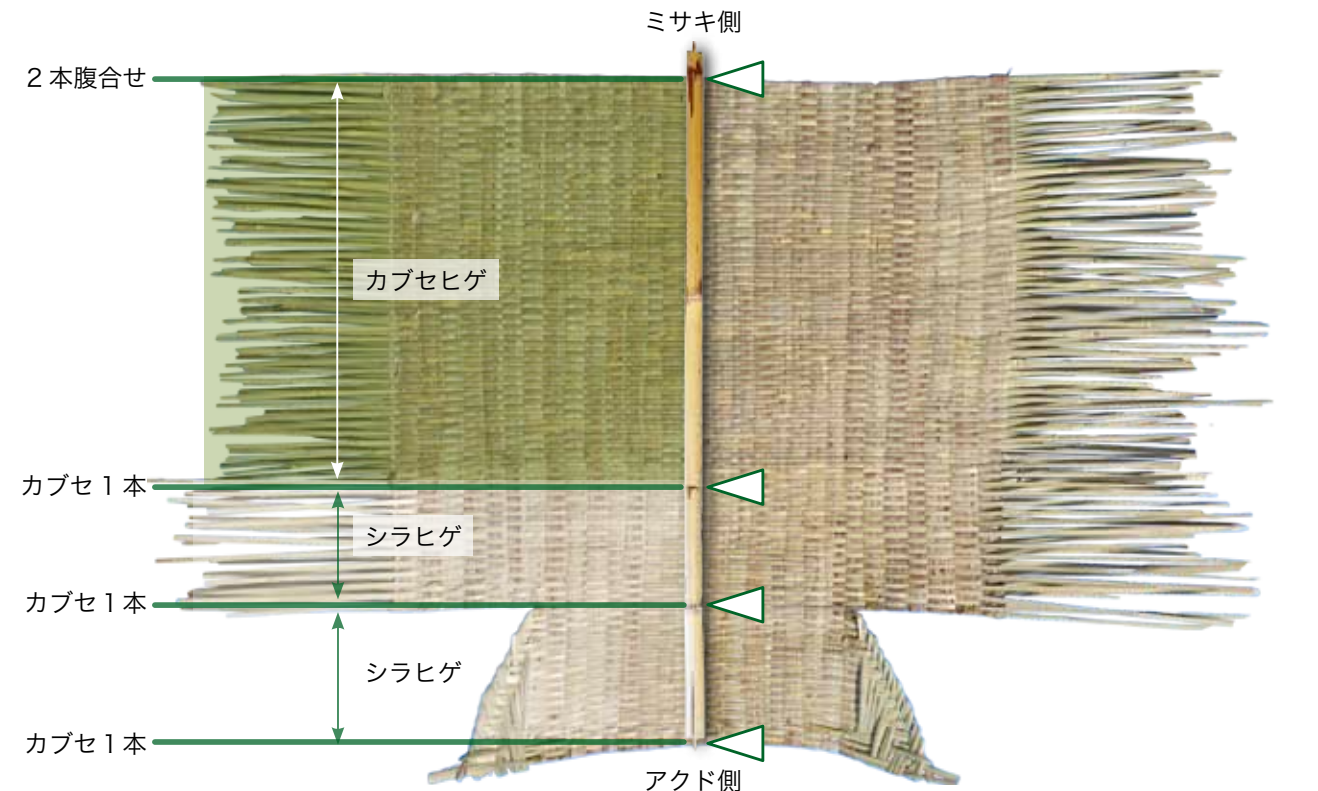


図3-15 イタミのシラヒゲとカブセヒゲ

※ここでは一斗箕のイタミづくりを解説しています

【基本の考え方と留意点】

織り物の要領で、ヒゲの間にフジを1本ずつ挟み、板状の箕をつくる。フジは、バランスをみながら適した厚み、幅のフジをその場でつくる(フジコサエ)

はじめる前のポイント

- ・ **キタチの先端、手、箕、材料は常に水で濡らしておく**
 ※ 作業を始める前に、箕のおもて面・裏面をしっかりと水で濡らす。材料を柔らかくして編み組みやすくすると同時に、手を切らないため
- ・ **イタミは一気に仕上げる**
 ※ 乾燥が進むと材が縮むため。特に最初につくるカシャゲメエはヒゲが動きやすいので、ヒックリカエシメエの上にアグラをかいて座り、しっかりと押さえる
- ・ **梅雨時や雨天時の作業は避ける**
 ※ 箕の材料は湿気にあてられると色・ツヤが悪くなるため。イタミを作り終えたら、扇風機をかける、すぐに干すなど、乾燥を心掛ける



図3-16 フジとヒゲ
 タライを左側に置き、水に浸けて柔らかくしたフジを使うたびに引きあげて使う

(1) フジコサエ | 1枚のフジを縦に裂く

※ ナカにはナカフジやシンフジ、ソデにはカワフジを用いる

① フジを水に浸す(ヒヤス)

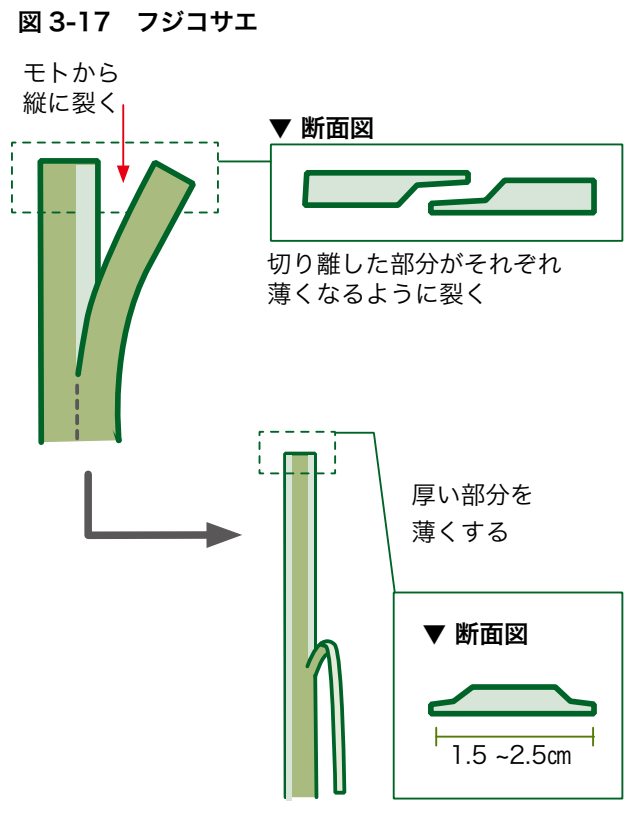
※イタミをつくる間、水を張ったタライにつけておき、使うたびに引き上げる(図3-16)

② フジの長さを揃える

必要な数のフジを、必要な長さ(ミサキ〜アクドの長さより両端5cmずつ長くする)に切り揃える

本数は、一斗箕でナカ・ソデ各14本(片面7本)、五升箕で各10本(片面5本)必要になる

※ フジの長さは一斗箕で約90cm、五升箕で約75cm
 ※ フジの幅は1.5cm~2.5cm。ナカもソデも最初は幅が狭いフジを入れ、6~7段目に幅広のものを入れる



③ フジを縦に裂く(図3-17上、3-18)

モト側からキリダシを入れ、左手で引きながら1.5~2.5cm幅の帯状に裂く。細くなったり薄くなってきたら刃物で少しずつ身を足して調整する

1本のフジから2~4枚のフジの帯がとれる

※フジが切れてしまわないよう、刃物は少しずつ入れるのがコツ

※ この時、左手でフジをクシュクシュとジャバラ状にする(図3-19)。こうしてフジのシワをのばし、平らに保つことでフジコサエがしやすくなるため

④ 両端を薄くする(図3-17下、図3-20)

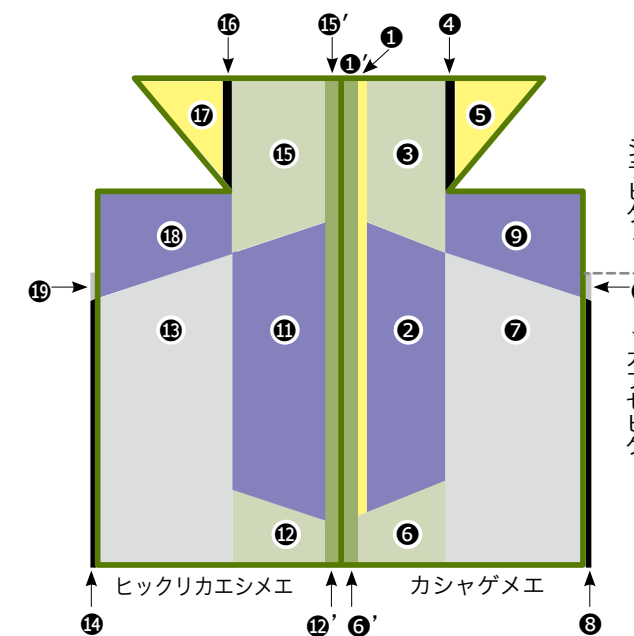
フジとヒゲの密着度が増すように(目が詰まるように)、コバ(木端/フジの両端)の厚くなっている部分をキリダシで薄く剥ぐ



上左: 図3-18 フジを縦に裂く
 上右: 図3-19 左手でジャバラ状にして皮の反りをのばす
 下: 図3-20 フジの両端を薄くする

図3-21 イタミをつくる順序(秋葉千枝子さんの場合)

※つくる順序は人によって多少異なるが、いずれも部分ごとにつくるのがコツ



【カシャゲメエ】

- ① ナカの1段目にフジを通す(ミサキ側は通さず残す) アクド側のユミ張りフジを処理する(①')
- ② ナカの2~7段目に台形状にフジを通す
- ③ ナカのアクド側2~7段目にフジを通す
- ④ アクドのフジを通す
- ⑤ アクド部分のヒゲを網代編みにする
- ⑥ ミサキのユミ張りフジを処理する(⑥')
- ⑦ ナカのミサキ側1~7段目にフジを通す
- ⑦' ソデのミサキ側1~7段目にフジを通す
- ⑧ シマイフジを通す
- ⑧' ソデのアクド側1~7段目にフジを通す
- ⑩ ⑧で入れたシマイフジを、シラヒゲとの境まで通す

【ヒックリカエシメエ】

- ⑪ ナカ1~7段目に台形状にフジを通す
- ⑪' ミサキのユミ張りフジを処理する(⑪')
- ⑪'' ナカのミサキ側1~7段目にフジを通す
- ⑬ ソデ1~7段目にフジを通す
- ⑬' シマイフジを通す
- ⑮ アクド側のユミ張りフジを処理する(⑮')
- ⑮'' ナカのアクド側1~7段目にフジを通す
- ⑮''' アクドのフジを通す
- ⑮'''' アクド部分のヒゲを網代編みにする
- ⑮''''' ソデのアクド側1~7段目にフジを通す
- ⑮'''''' ⑮'''''で入れたシマイフジを、シラヒゲとの境まで通す

(2) イタミをつくる | ヒゲの間にフジを挟む

※ p.31 図 3-21 の順番でヒゲとヒゲの間にフジを挟む

① ヒゲ拾い

ヒゲはユミ張りしたフジの上、下、上、下と交互に並んでいるので、下側にあるヒゲを拾い(手で持ち上げ)、拾い終わったヒゲの下にキタチを差し入れる

※ ヒゲは、右手と左手でそれぞれ両側から中央に向かって拾う

② ヒゲとヒゲの間隔を調整する(ヒゲクバリ)

ヒゲ同士の間隔を広げるようにヒゲを上下左右に引っ張ることで、下のヒゲがきちんと上にあがってくるようにする(図 3-23)。また、ヒゲがフジに対してまっすぐになるよう調整する。この作業をヒゲクバリという

③ フジを通す(図 3-22)

フジコサエしたフジを上下のヒゲの間にまっすぐ挟むナカをつくる時はナカフジやシンフジを、ソデはカワフジを用いる
フジのおもて裏は材によって下記のとおりにする

【フジのおもてと裏】

- カワフジ 芯側をおもてに
- ナカフジ 芯側をおもてに
- シンフジ 表皮側をおもてに

※ シンフジの芯側は濡れるとヌルヌルするため

※ フジを通す際、フジのモトとウラの方向は特に気にしなくてもよいが、仕上がりの厚みが均一になるようにフジコサエの厚さを調整する

※ ヒゲに大きな節(メ)がある場合は、フジの下に隠す。どうしてもフジの上にくる場合は、フジのちょうど真ん中にくるように微調整する(フジの切れ目部分にフジが当たると、そこから折れやすいため)

④ キタチでしごく

左手でイタミの端から出たフジの先端を持って引っ張る。右手でキタチを逆手に持ち、先端部分でフジの裏側をしごく(図 3-24)

その際、手首を少し返すことでキタチの背の部分を立て上げ、ヒゲとヒゲの間が開くようにする。そこにフジを押し込む。フジのおもて側も同様にしごく



図 3-22 フジを通す ※ p.31 図 3-21 ②

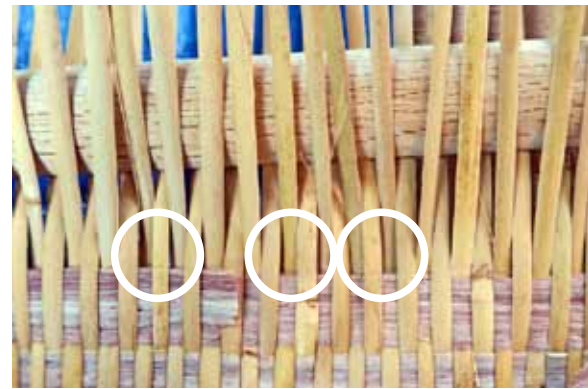


図 3-23 ヒゲクバリ ○で示した部分は、下のヒゲがまっすぐあがっていないのでヒゲを左右に引っ張ってヒゲ同士の間隔をあける



図 3-24 キタチでしごく



図 3-25 バリ フジの下端から1-2mmの所を押さえる

⑤ 箕づくり小刀でさらに押し込む(バリをカク)

箕づくり小刀の背の部分でヒゲの噛み合わせ附近をしごき、フジをさらに奥に押し込む(図 3-25)
これを「バリ」「バリをカク」という

⑥ フジの端の処理

通したフジの端は、ミサキ側は箕の裏側に、アクト側は箕のおもて側に折り返し、ヒゲ2本の間に挟む(図 3-26)

※ ミサキ側は仕上がりの美しさを考えて裏側に織り込む。アクト側は仕立てをすると隠れてしまう部分なので、おもて側に織り込む

また、ヒゲの下にフジを挟む際、端を△に折る。△は次のフジが入る方向が欠けるように作る(図 3-26)

※ フジを△に折るのは、次のフジを入れやすくするためと、厚みを出して端をとめる意味がある

一段おきにフジが一番端のヒゲに引っ掛からない位置にきている。この場合はフジを折り返せないで、フジを一番端のヒゲの上に出してから折り返す(図 3-27)

【様々な調整】

● フジが薄い、フジの幅が狭い場合(図 3-28)

具合の悪いフジの上に短く切った別のフジ(ノセカワ)を重ねる
カワフジにのせる場合はカワフジを、シンフジやナカフジにのせる場合はシンフジやナカフジを用いる
端は特に織り込む必要はない(イタミができた段階でヒゲから出た部分を切り取る)

● フジの幅が一部分だけ広い場合

幅がまっすぐになるよう、飛び出た部分を刃物で切り落とす

● ヒゲが折れてしまった場合(図 3-29)

ヒゲが折れたりした場合は、ヒゲを継ぎ足す。
フジの真ん中に当たるところでヒゲを切り取り、先端を尖らせた別のヒゲをその下に差し込む

※ 図 3-29 のように折れたヒゲの下に別のヒゲを挟んでおくと、作業が楽になる

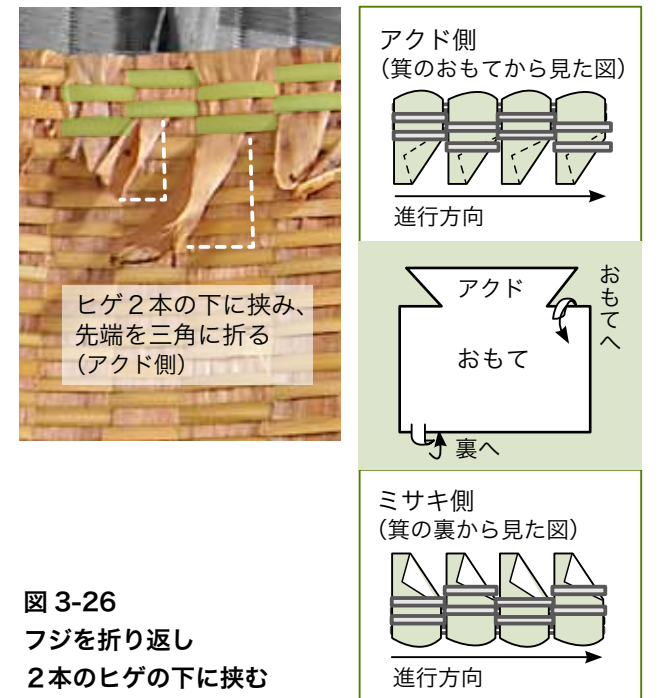


図 3-26 フジを折り返し2本のヒゲの下に挟む

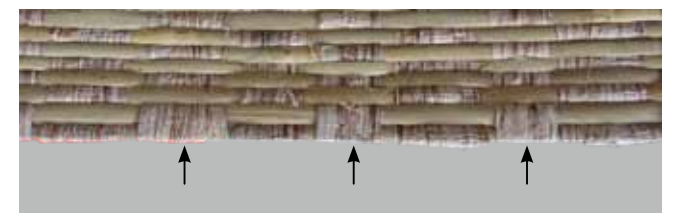


図 3-27 端の処理

矢印部分は、本来、一番端のヒゲがフジの上にあった個所。2本越しにして折り返す。図はミサキ側



図 3-28 ノセカワをする こまめにするのがコツ!



図 3-29 ヒゲを継ぎ足す

1. カシャゲメエをつくる

(1) ナカをつくる (p.31 図3-21 ①②参照)

アクトが向かって左になるように置き、手前の半身部分(押さえヒゲのない方)の上にゴザを敷いて、その上にあぐらをかいて座って作業をする。ヒゲがずれやすいので、図3-30のとおり、部分的に作っていく

① 1段目のフジ/ユミ張りフジの処理 (アクト側)

(図3-30 ①)

両脇の20数本(上下あわせて)のヒゲを残してヒゲを拾い、ヒゲを上につるようにならしてヒゲクバリをする。ヒゲを拾った部分にフジを通す

アクト側のユミ張りフジ1本(カシャゲメエ側)のうち、ユミについていなかった2/3を、箕のおもて側に折り込む (p.36 図3-38も参照)

アクト側の1段目(フジを入れずに残しておいた部分)にフジを通し、フジの端をおもて側に折り込む (p.33 図3-26)

1段目のフジを通した部分は、押さえヒゲを外す
 ※ フジを入れていないミサキ側の20数本分については押さえヒゲを取り除くとバラバラになってしまう。押さえヒゲをずらしてこの部分だけ必ず残しておく

② ナカの2段目~7段目にフジを通す (図3-30 ②)

1段目のナカフジを入れたヒゲから、ミサキ側は4本位(上下あわせて)左のヒゲから、アクト側は20数本のヒゲを残してフジを通す

その後、前の段のフジを入れたヒゲより、左右とも4本程度ヒゲを減らして拾い、フジを通す の繰り返し
 ※ 結果的に、台形にフジが入ることになる (図3-31)

最後のフジを入れる前に、キタチでナカの幅をはかり、ナカ7段目のフジの幅を調整する (p.37 図3-40の(a))

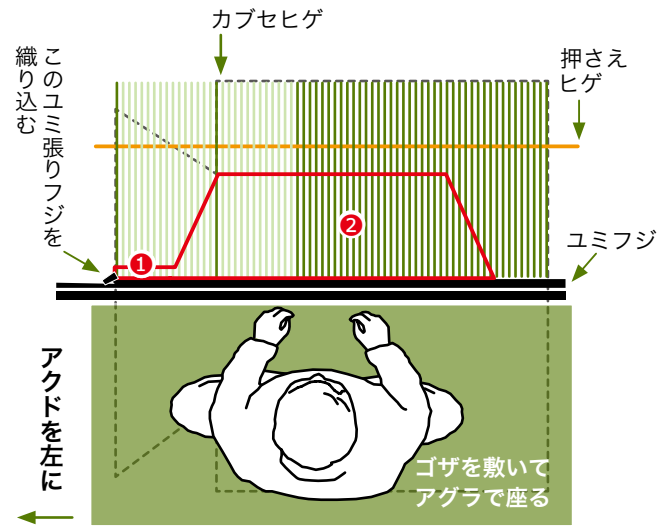


図3-30 つくり始めの位置
アクトが左になるように置き、最初に赤い部分をつくる



図3-31 ナカの真ん中を織り終わった状態 (上図の②)
できあがりは台形のようになる

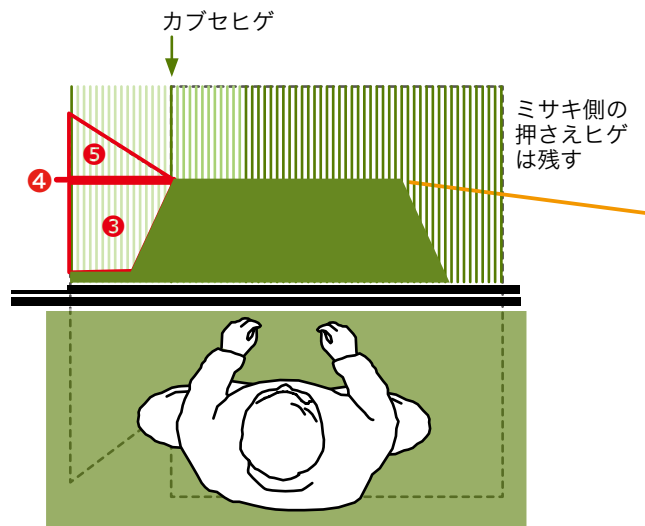


図3-32 アクト部分をつくる

(2) ナカのアクド側をつくる (p.31 図3-21 ③④参照)

① ナカのアクド側にフジを通す (図3-32 ③)

ナカのアクド側(フジを入れずに残しておいた部分)にフジを最後まで通す。フジの端はおもて側に折り返し、ヒゲ2本の下に挟む (p.33 図3-26 参照)

② アクドのフジを通す (図3-32 ④、図3-33)

ナカ7段目の次の段のアクド部分に、フジを1本通す幅1.5~2cm程度のカワフジを使用
 ※ ナカフジでも問題ないが、隠れてしまう部分なのでカワフジでよい

カブセヒゲ(皮を上にして挟んだヒゲ)から左側がアクド部分となるが、カブセヒゲがナカ7段目のフジの下にきている場合はカブセヒゲから拾いはじめ、カブセヒゲが上にきている場合はカブセヒゲは拾わず、その左から拾いはじめる

→ 「カブセが下ならアクト側」と覚える

アクドのフジの両端は、箕のおもて側に折り込む

※ アクドのヒゲの本数によりカブセヒゲの上下は異なるが、カシャゲメエとヒックリカエシメエでは逆になっているので注意が必要。また、上記のように拾わないと、この部分に隙間があいてしまう

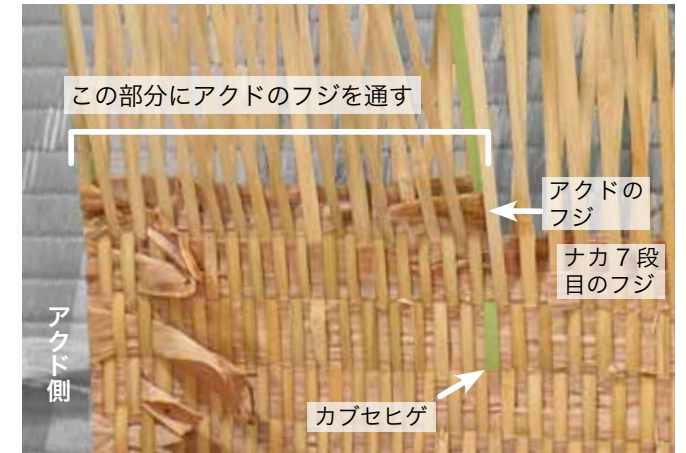


図3-33 アクトのフジを挟む カブセヒゲがナカ7段目のフジの下にきているので、アクトのフジに組み込む

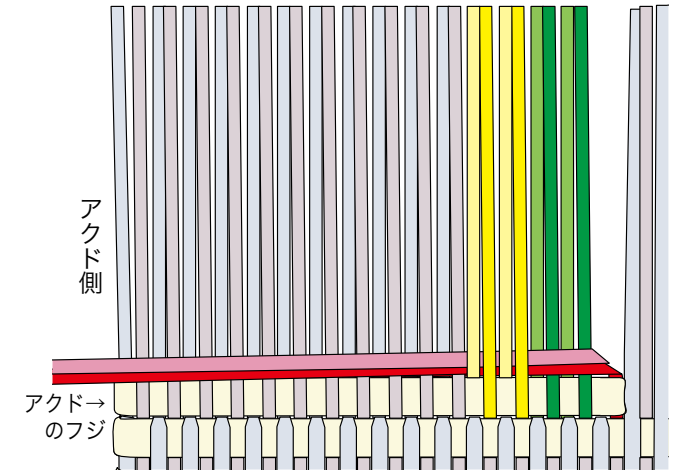


図3-34 折り返した2本(赤)を4本(緑)の上を通して4本(黄色)の下に入れる

(3) アクトをつくる (図p.31 図3-21 ⑤参照)

① 準備

箕作り小刀の背などでアクトのフジ(図3-32 ④)部分をトントンと叩き、フジを詰めておく
 箕が乾いている場合はアクトの周囲を水で湿らす。手も少し湿らせておく

※ アクト部分のヒゲ、アクトのフジ、ナカ7段目のフジが濡れていればよい

② アクトをつくる (網代編み/図3-34)

① 一番右(ミサキ方向)のヒゲ2本(赤)をアクト側に90°折り返す。それを隣の4本(緑)のヒゲの上を通して、その隣の4本(黄)のヒゲの下に入れる(図3-34)。この①の作業を合計5回行う

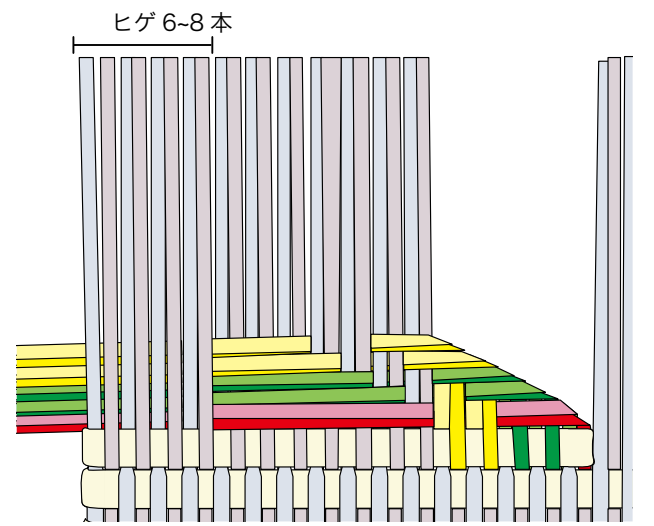


図3-35 ①を5回繰り返したら、すべてのヒゲの先端を、アクト左端のヒゲ6~8本の下に入れる

② ①で編んだ分のヒゲの先端を、アクト左端の6～8本のヒゲの下に入れる (p.35 図3-35)

③ ①を4回繰り返して、編んだ分のヒゲの先端を、アクト左端から4本のヒゲの下に入れる

④ ①を2回繰り返す

⑤ 2本を折り返し、隣の4本の上に通し、その隣のヒゲの下に入れる。これを2回繰り返す

⑥ 2本を折り返し、左端の1本の下に通す。最終的に残りが3～4本になるまで続けて行なう

⑦ 最終的に数本残った一番右のヒゲ1本で、他の2～3本をおもて側から裏側に向けて1回巻き、先端を網代の編み目に挿し込む

※ 編み込んでいく2本を、どの角度で曲げるかが重要。傾斜が急になりすぎたり緩くなりすぎないように気を付ける (図3-37)

※ 慣れないうちは、折り曲げる2本のヒゲを先に曲げてクセをつけておいてからヒゲの下に通すとよい

③ 仕上げ

編んだ部分 (特にヒゲを折り曲げた部分) を箕作り小刀などの柄で叩いてなじませる

※ 次の作業に移る前に、アクト左側に出たヒゲの上にキタチなどを載せて重しにおく。アクト部分が上に持ち上がろうとして作業の邪魔になるため

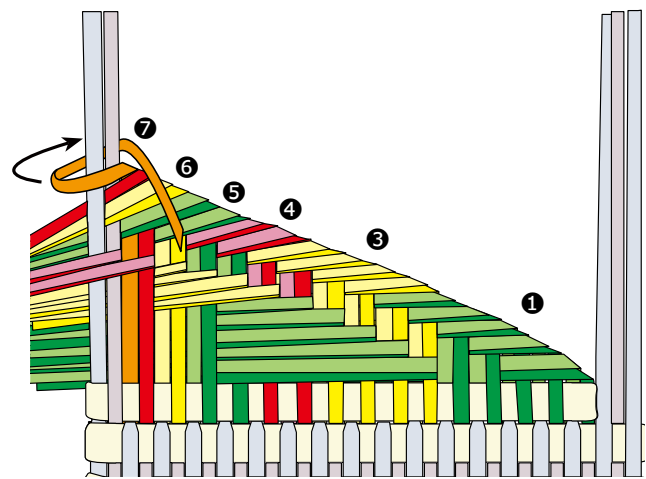


図3-36 残り数本になったら、一番右のヒゲで残りのヒゲを包み、ヒゲの先端を網代の編み目に挿して固定する

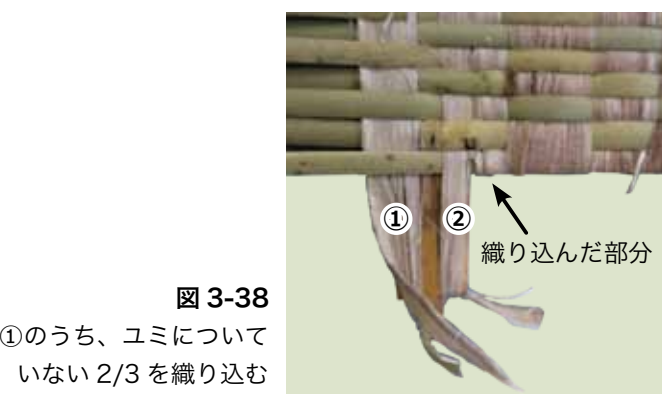
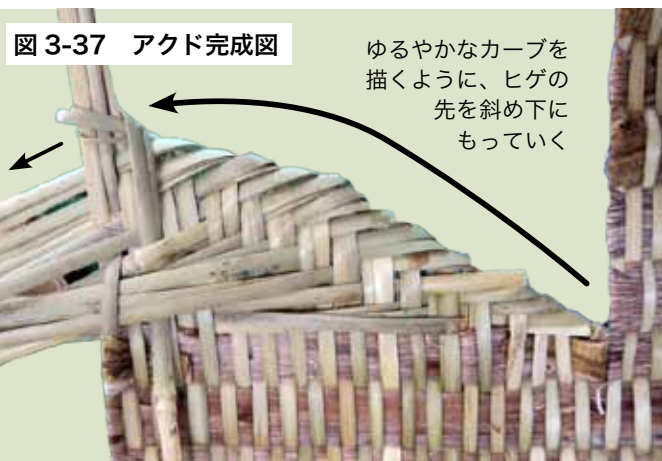


図3-38 ①のうち、ユミについていない2/3を織り込む

(4) ナカのみサキ側をつくる (p.31 図3-21 ⑥参照)

① ユミ張りフジの処理 (みサキ側)

みサキ側のユミ張りフジ1本 (カシャゲメエ側) のうち、ユミについていなかった2/3を箕の裏側に折り返し、ヒゲ2本の下に挟む (図3-38)

② ナカのみサキ側をつくる (図3-39 ⑥)

ナカのみサキ側 (フジを入れずに残しておいた部分) にフジを最後まで通す。フジの端は裏側に折り返し (アクト側と反対)、ヒゲ2本の下に挟む (p.33 図3-26 参照)

※ ナカをすべて作ったら押さえヒゲは外してよい

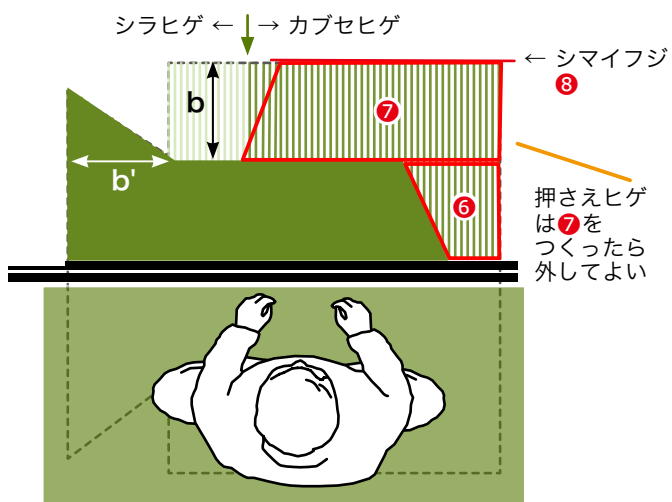


図3-39 ソデをつくる bとb'の長さを等しくするため、ソデに通すフジの幅を調整する

(5) ソデをつくる (7列) (p.31 図3-21 ⑦～⑩参照)

① みサキ側にフジを通す (1～7段) (図3-39 ⑦)

ソデのみサキ側 (シラヒゲとカブセヒゲの境あたりまで) のヒゲを拾い、カワフジを通す。みサキ側のフジの端は裏側に折り込む

※ カワフジはナカフジやシンフジよりも元に戻る力が強く、仕立ての際にキリで穴をあけても穴が締まるため、ソデ7段目のフジは必ずカワフジとする
1～6段目も、通常カワフジとする

段が進むにつれ、アクト側で拾うヒゲの数を4本位ずつ減らしていく。みサキ側は最後までフジを通す

途中、キタチに刻まれた印で尺をはかり、ソデの幅 (b) とアクトの高さ (b') が等しくなるように、通すフジの幅を調整する (図3-40)

※ 最後に幅を調整しやすいように、1段目のカワフジは細めのものを入れる

端が丈夫になるように、6段目、7段目のフジはできるだけ頑丈で幅広なものを選ぶ

※ また、7段目が細いとスミカ (アクトの補強、p.53 参照) が入りにくい

② シマイフジ (シメフジ) を通す (図3-39 ⑧、図3-41)

ソデ7段目のフジの次に、幅0.5cm程にフジコサエしたシマイフジを通す

シマイフジのみサキ側の端は図3-42のように止め、アクト側は長くのばしてそのまましておく

最後に薄い刃物の背などでシマイフジをトントンと押し込み、締める

※ この時、シマイフジを入れた部分は、ヒゲのモト側がシマイフジの上にくるようになっていなければならない。仕立ての際、下のヒゲに負荷がかかるため、丈夫なウラ側を下にもってくるためとされている

③ ソデのアクト側をつくる

ソデのアクト側 (フジを入れずに残しておいた部分) に最後までフジを通す。フジの端はおもて側に折り返し、ヒゲ2本の下に挟む (p.33 図3-26 参照)

②で挟んだシマイフジのアクト側の端を、カブセヒゲとシラヒゲの境まで入れる

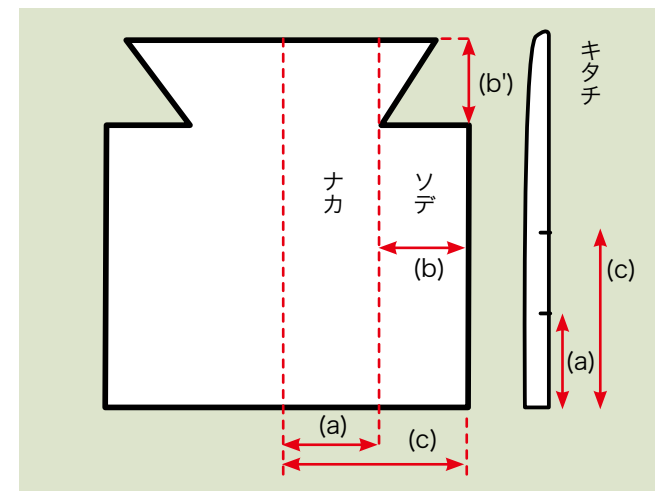


図3-40 キタチで尺をはかる

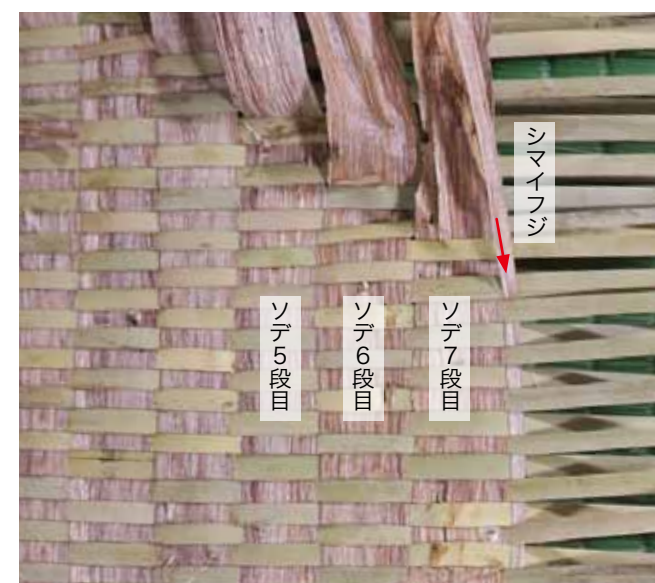
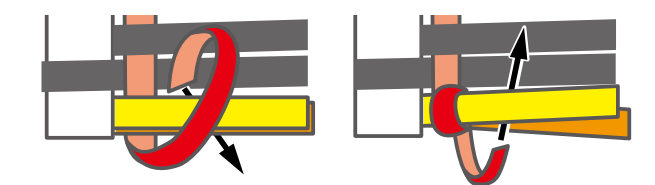


図3-41 シマイフジ



① みサキの2本のヒゲに1回巻き付ける ② 先端をみサキの2本のヒゲの間に挟む

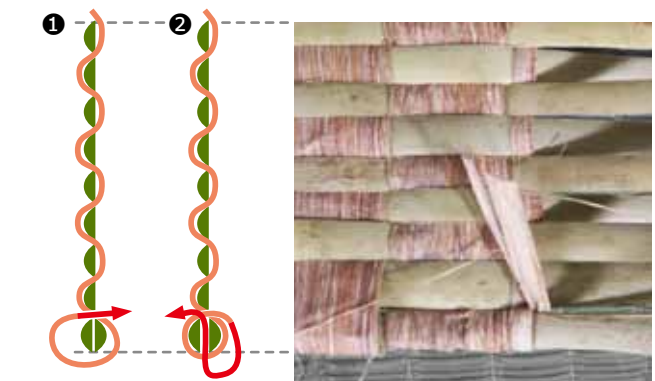


図3-42 シマイフジの止め方



シラヒゲ部分はシマイフジを入れていないため、ウラが上(ウラテン)になる

カブセヒゲの部分にシマイフジを入れたことで、この部分のヒゲは、すべてモトが上にあがってきている

図 3-43 半身 (カシャゲメエ) が完成

2. ヒックリカエシメエをつくる

基本的にカシャゲメエと同じ作業の繰り返しだが、つくる順番が異なる (p.31 図 3-21 参照)

(1) ナカのみサキ側をつくる (7列)

(p.31 図 3-21 ⑪⑫参照)

① 準備

箕をひっくり返して置き、つくりあがった半身 (カシャゲメエ) の上にゴザを敷き、あぐらをかいて座る。つくり始める前にヒゲクバリをして全体的にヒゲの間隔を調整する

② ナカのフジを通す (1~7段目)

両端にヒゲを 20 本程 (上下あわせて) 残して中央部分のヒゲを拾い、フジを通す (図 3-44 ⑪)

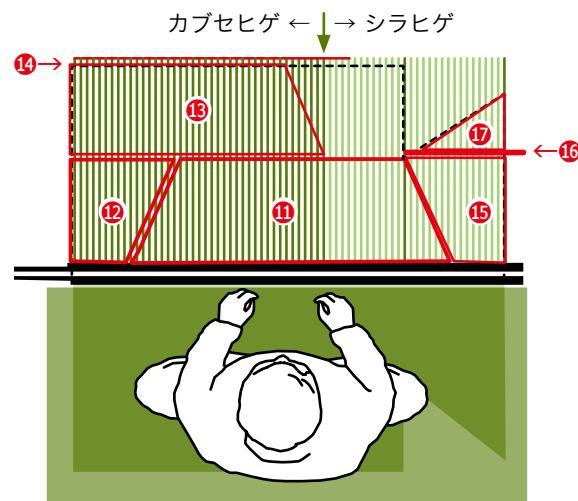


図 3-44 ヒックリカエシメエをつくる

その後、左右 4 本ずつ (上下あわせて) ヒゲを減らしながらヒゲを拾い、フジを通す (台形に仕上がる)

③ ユミ張りフジの処理 (みサキ側)

ヒックリカエシメエのみサキ側のユミ張りフジ 1 本のうち、ユミについていなかった 2/3 を、箕の裏側に折り返し、ヒゲ 2 本の下に挟む (p.36 図 3-38 の①のフジ)

④ ナカのみサキ側をつくる (図 3-44 ⑫)

ナカのみサキ側 (フジを入れずに残しておいた部分) にフジを最後まで通す。フジの端は裏側に折り返し、ヒゲ 2 本の下に挟む (p.33 図 3-26 参照)

(2) ソデのみサキ側をつくる (7列)

(p.31 図 3-21 ⑬⑭参照)

① ソデのフジを通す (1~7段) (図 3-44 ⑬)

ソデのみサキ側 (カブセヒゲとシラヒゲの境あたりまでのヒゲを拾い、カワフジを通す。段が進むにつれ、アウド側で拾うヒゲの数を 4 本ずつ減らしていく。みサキ側は最後までフジを通す

途中、キタチで尺をはかり、ソデとアウドの幅が合うように、通すフジの幅を調整する

② シマイフジを通す (図 3-44 ⑭)

ソデ 7 段目のフジの次に、幅 0.5cm 程にフジコサエしたシマイフジを通す。みサキ側の端は図 3-42 (p.37) のように止め、アウド側は長くのばしてそのままにしておく

※この時、シマイフジを入れた部分のヒゲは、モト側が上にくる

(3) ナカのアウド側とアウドをつくる

(p.31 図 3-21 ⑮⑯⑰参照)

① ユミ張りフジの処理 (アウド側)

ヒックリカエシメエのアウド側のユミ張りフジ 1 本のうち、ユミについていなかった 2/3 を、箕のおもて側に折り込む

② ナカのアウド側のフジを通す (図 3-44 ⑮)

ナカのアウド側 (フジを入れずに残しておいた部分) にフジを最後まで通す。フジの端はおもて側に折り返し、ヒゲ 2 本の下に挟む (p.33 図 3-26 参照)

③ アウドのフジを通す (図 3-44 ⑯)

ナカ 7 段目の次の段のアウド部分に、フジを 1 本通す。幅 1.5~2cm 程度のカワフジを使用する

カブセヒゲ (皮を上にして挟んだヒゲ) から右側がアウド部分となるが、カブセヒゲがナカ 7 段目のフジの下にきている場合はカブセヒゲから拾いはじめ、カブセヒゲが上にきている場合はカブセヒゲは拾わず、その右から拾いはじめる (必ずカシャゲメエと反対になる)。アウドのフジの両端は、箕のおもて側に折り込む

④ アウドをつくる (網代編み)

カシャゲメエと同じ方法でアウドを編む (p.35-36 参照)

(4) ソデのアウド側をつくる (p.31 図 3-21 ⑱⑲参照)

ソデのアウド側 (フジを入れずに残しておいた部分) にフジを最後まで通す。フジの端はおもて側に折り返し、ヒゲ 2 本の下に挟む (p.33 図 3-26 参照)

途中まで通しておいたシマイフジのアウド側の端を、カブセヒゲとシラヒゲの境まで通す

3. イタミの仕上げ

① フジを整える

折り返したフジの先をヤットコや手で引っ張って全体を締め、余分な部分はキリダシ等で切り揃える(図3-45)。箕のおもて面に飛び出ているノセカワ等のフジの端も切り取る



図 3-45 フジを引っ張って締める

② ミサキ側のユミ張りフジの処理(図3-46)

ユミを外してミサキ側のユミ張りフジ(ユミについていた1/3)を処理する。イタミを裏面にし、向かって左側のユミ張りフジの先を反対面(箕のおもて面)に折り返す。下から2本目のヒゲの下に箕作り小刀を入れて隙間をこじあげ、この間にフジを挿し込む

イタミをおもて面にし、残ったユミ張りフジを反対面(箕の裏側)に折り返し、ヒゲの間に挿し込む

※ 2本のユミ張りフジを、それぞれ箕のおもてと裏に折り返すことになる(フジがヒゲに引っ掛かる方向に折ると、必然的におもて・裏になる)。アクト側のユミ張りフジは仕立ての際に隠れるので特に処理せず、切り落とす

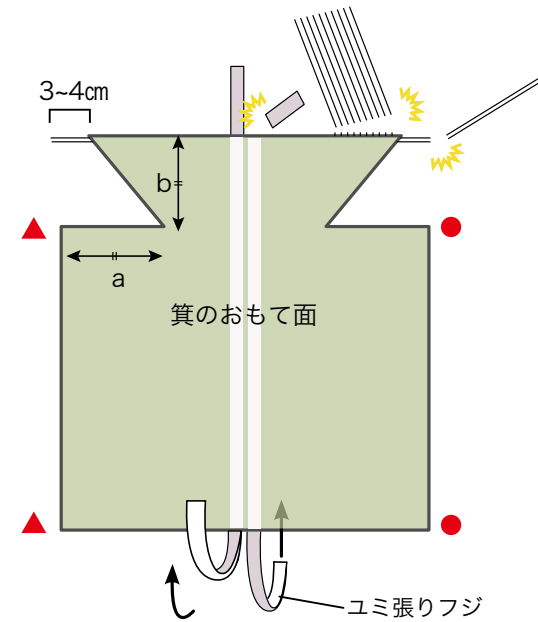


図 3-46 アクトの上に出たヒゲは根元から切り取り、左右に出たヒゲは3~4cm残して切り落とす

③ ヒゲの処理(図3-46)

アクト部分の余分なヒゲを切り落とす

④ 寸法の確認

箕を横半分に折ってみて、ゆがみがないか、寸法が合っているか確認する

この時、図3-46の●と●、▲と▲が合えばOK。また、aとbの長さが等しくなければならない

⑤ 乾燥させる

風が通るように立てかけて干す(図3-47)



図 3-47
立てかけて干す

第4章

仕立て

1. ウデギづくり

(1) 準備

ウデギ材のモウソウチクが乾燥していた場合、水に浸けておく（ヒヤス）

※ 乾燥がひどい場合は3日くらい水に浸けておく。本来は生のまま削るのが一番よい（モウソウチクは他の竹に比べても硬いため）

(2) 整形

① フシを削り取る

タケのフシ（身側、皮側両方）の上下から刃物（キケズリ）を当て、フシを削り取る

② 整形と面取り

刃物を右手に持って膝のところで固定しておき、左手でタケを手前に引きながら削り、整形する

まず先端に向けて細くなるように削る（図4-1上）。この時、元々材が太いモト側と、カラが当たる部分（ソトダケは外皮側、ウチダケは身側）を重点的に削り取る

その後、全体に角を落として面取りする

※ 整形は、仕立て作業でカラを巻く時にカラが切れないように、また握った時に握り心地が良くなるように行なう

③ ソトダケ（ウデギ）を曲げる

ソトダケのモト側の端に図4-3のようにカラを結び、ソトダケをU字に曲げる（図4-2）

モト側に結んだカラの端を伸ばし、タケを曲げた状態でウラ側を結び、仮止めする

※ 外皮を外側にして曲げる（自然に曲がる方向、反対に曲げると折れるため）

キジュン（基準となるヨソドメ製の型、p.5図1-3②）に合わせてかたちを調整する

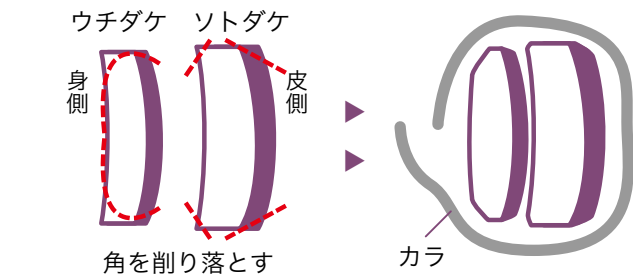
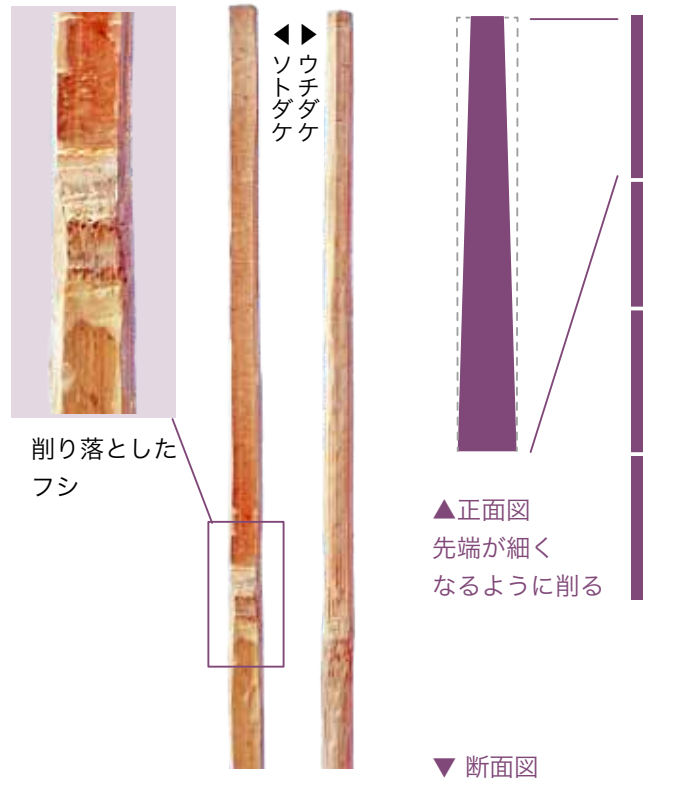


図4-1 ウデギの削り方



図4-2 ウデギをU字状に曲げる

※ キジュンはソトダケに合わせて作ってある。キジュンの幅はイタミの幅よりフジ3本分狭く調節してある（図4-3右上）

※ ウデギは、箕の完成時、箕を逆さまに立てたら自立するくらいのカーブが最適だという

※ ウデギの型づくりはソトダケのみ。ウチダケは箕にはめこむ時に曲げる

※ ソトダケは、トダケともいう

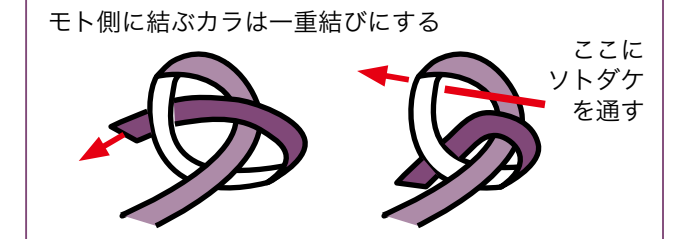
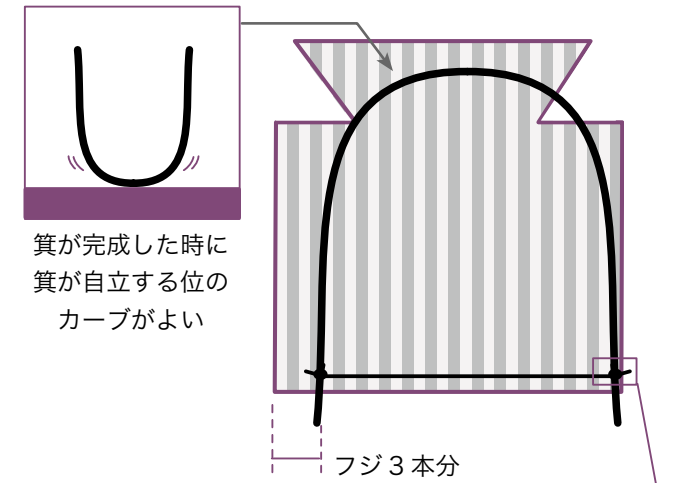


図4-3 ソトダケを曲げる

2. カラヘゲ

(1) 準備

乾燥させておいたカラを3時間程、水に浸ける（ヒヤス）

(2) カラヘゲ | カラを2枚にヘゲ（図4-5）

カラトリしたカラの、モト側の皮側にキリダシで切込みを入れる

右手に身（芯）側、左手に皮側がくるようにし、2枚に剥がしていく

※ カラとして使用するのは外皮側

※ よいカラはそこそこの厚みがあり、かつ厚みが均一なもの、引っ張りに強いもの

フジに通しやすいように、カラのモト側の先端は尖らせておく

※ カラはモト側から通すのが原則

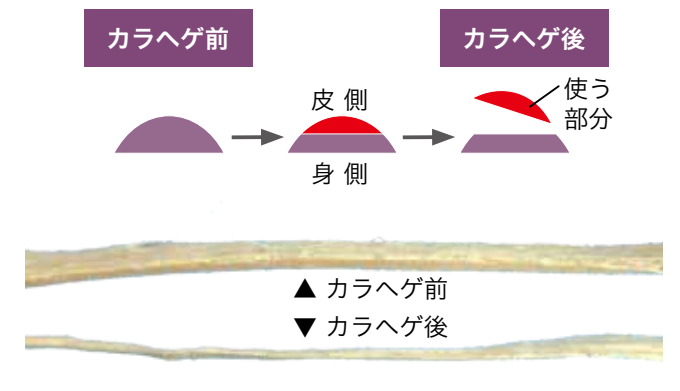
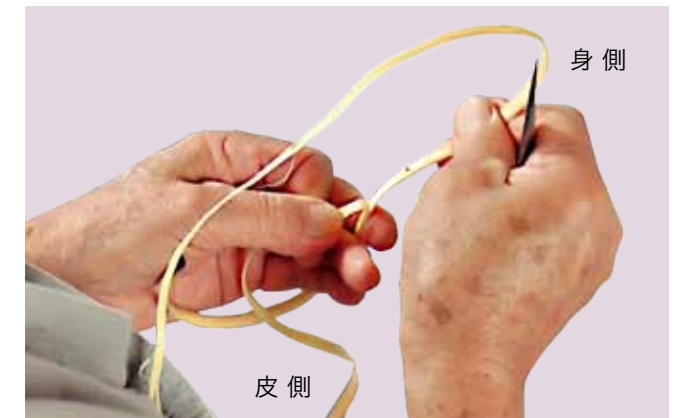


図4-4 カラヘゲの前と後

右手と左手の引き加減で厚さを調整する。★の部分が弧を描くように剥ぐ



図4-5 カラヘゲ



※ここでは一斗箕の仕立てを解説しています

【基本の考え方と留意点】

アクト部分を折り曲げ、カラで縫って固定してから、ウデギをカラで結いつける

シノダケの性質上、ヒゲは身（芯）側に向けて曲げることはできるが、外皮側に向けて曲げることはできない（曲げると折れる、図4-6右下）

このため、以下のようにヒゲの処理方法を変える

・シラヒゲ部分（身側が上）：
すべて箕の内側に曲げてカラで止める → オオゲエシ

・カブセヒゲ部分（皮側が上）：
半分は箕の外側に、半分は内側に曲げる。外側に曲げるものはそのまま曲げ、内側に曲げるものはヒゲをねじりながら曲げ、カラで止める → シホンバリ

※ シラヒゲ部分からカブセヒゲ部分に移るところでオオゲエシからシホンバリに切り替える

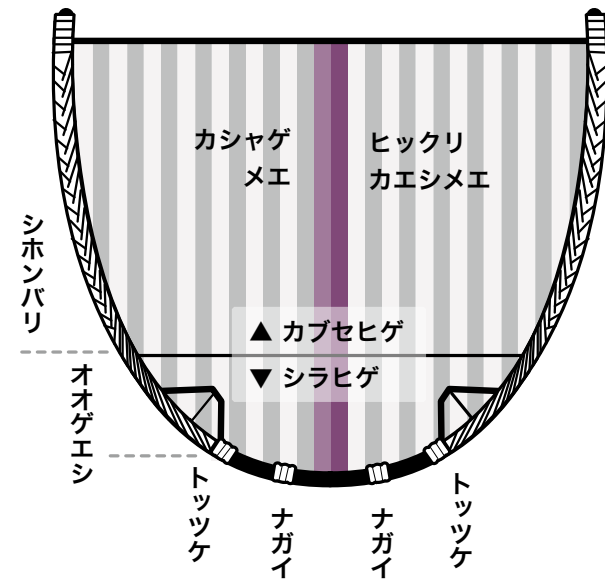


図4-6 オオゲエシとシホンバリ



図4-7 カラのツルツル面（皮側）とザラザラ面（身側）

はじめる前のポイント

・カラをイタミに通す際にはモト側から、フジに通す

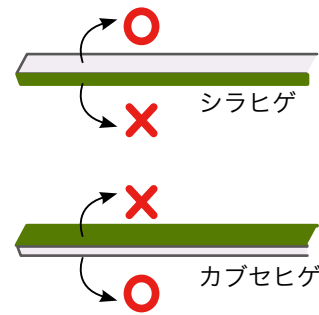
※ キリで先に穴をあける際、必ずフジ部分にあける（ヒゲを傷つけない）。またカラを通す際は、モト側から通すのが原則

・カラはねじらないよう、また原則として外皮側（ツルツルする面）がおもてにくるように使う（図4-7）

※ ねじれると切れやすくなる

・トツケを結うカラは、丈夫で質のよいものを選ぶ

※ トツケのカラは継ぐことができないため



1. アクトを縫い合わせる

(1) 準備

① 水で濡らす

イタミの周囲とアクト（仕立てをする部分）を水で濡らし、湿らせる。カラは作業の間、タライの水につけて左脇に置いておく

※ イタミは、シマイフジとソデ7段目のフジ、またアクト部分をしっかり濡らす（中央部分は濡らさない）

② フジを締める

シメフジウチ（もしくは包丁などの薄い刃物の背）でイタミ両端のシマイフジを叩き込み、締める

(2) アクトを縫い合わせる（トツケ）

※アクトの縫い合わせ〜アクトの上でウデギを結いつけるまでの一連の工程をトツケと呼ぶが、便宜上、アクトの縫い付けと、ウデギの結び付け（p.47〜）を別に記す

① カラのウラ側を結ぶ

一尋弱（1.5m）の長さのカラの、ウラ側の端を図4-8のように結ぶ

② アクトの内側から外側に向けてカラを通す

図4-9の★位置のフジに、箕の内側（おもて）から外側（裏）に向けてキリを刺し、カラのモト側（結んでいない方）から穴に通す

※ 通す穴は、2本目のフジ × 5本目と6本目のヒゲの間
※この時、キリはヒゲに刺すのではなく、ヒゲとヒゲの間に刺すように気をつける。ヒゲに穴をあけると、ヒゲが裂けてしまうため

カシャゲメエ、ヒックリカエシメエに同様に通す

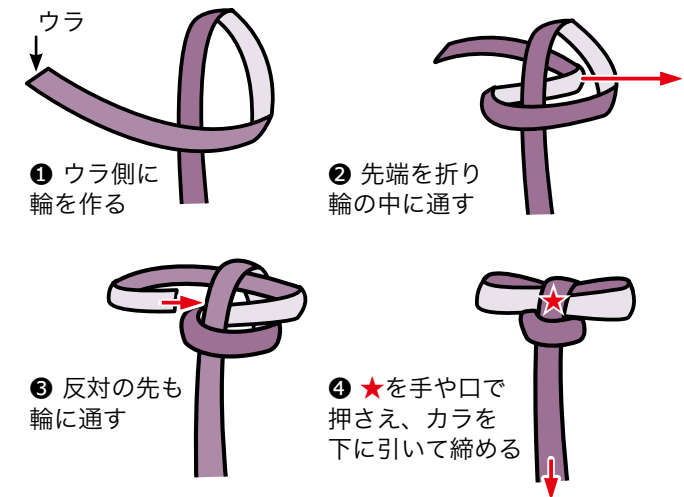


図4-8 カラの端を結ぶ

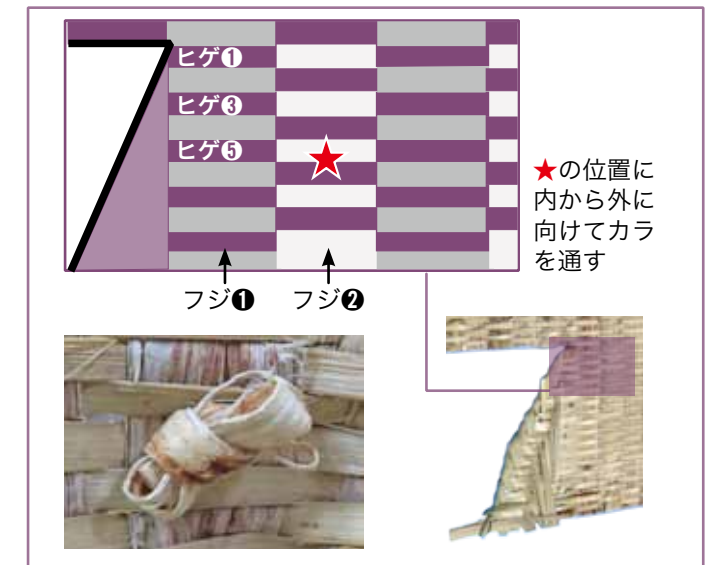


図4-9 カラを通す位置と結び目

右図の★と★を合わせるように折る
垂直に立ち上げると▲部分に穴が開くので、ソデのヒゲ3本分くらい内に入るように合わせる（下図）

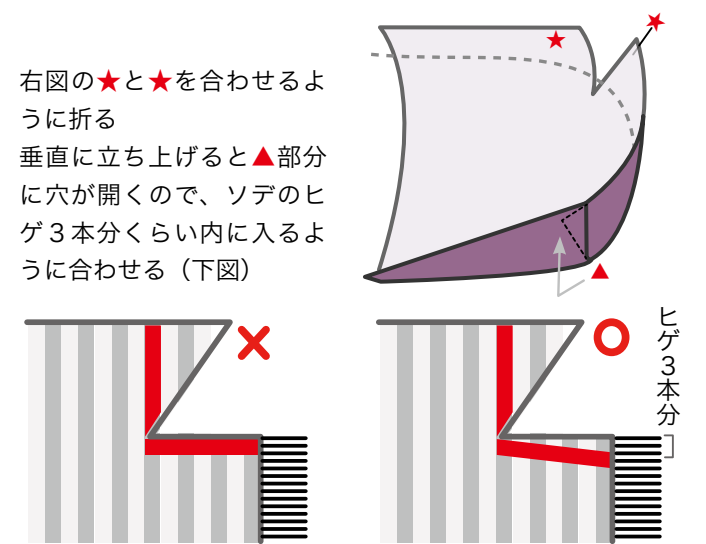


図4-10 アクトとソデを折り合わせる図
赤い部分が右図のように重なるよう、折り曲げる

- ③ アクドとソデを折りあわせる (p.45 図 4-10)
 イタミを折り曲げ、アクドの端とソデ部分をあわせる
 ※ 直角に曲げると穴があいてしまうため、ソデ側のヒゲ3本分くらい、内に入るように合わせる
- ④ アクドをカラで縫い合わせる
 カシャゲメエから作業する
 キリで穴を空け、②でアクドに通したカラの先 (モト側) を通していく

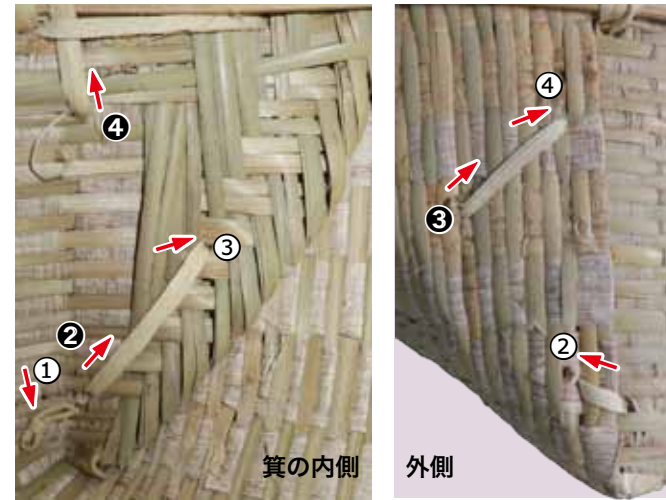
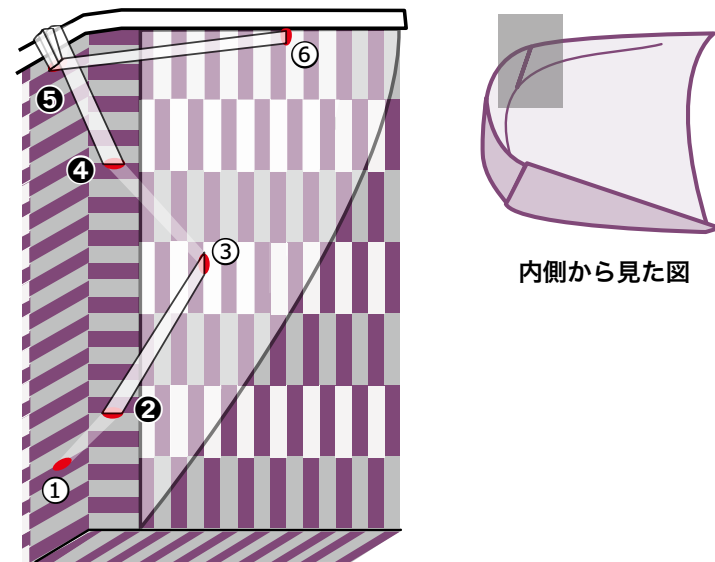


図 4-11 アクドを結いつける

カラを通す位置 (図 4-11、図 4-12)

※ 通す穴の位置は厳密に決まっていないため
 下記はおおよその位置になる
 (⑤⑥については p.47 以降へ)

- ① アクドに通しておいた穴 (p.45 図 4-9)
 (内から外)
- ② (箕の外側からみて)
 端から 2 本目と 3 本目のヒゲの間
 ×
 下から 2 番目のフジ (外から内)
- ③ (箕の内側からみて)
 アクド部分の真ん中あたり (内から外)
- ④ (箕の外側からみて)
 端から 2 本目と 3 本目のヒゲの間
 ×
 上から 2~3 本目のフジ (外から内)
- ⑤ (箕の内側からみて)
 上から 2~3 本目のヒゲの間
 ×
 ナカ 7 段目のフジ (外から内)
- ⑥ (箕の内側からみて)
 アクドの真ん中あたり
 ×
 ウデギのすぐ下のフジ (内から外)



白が「向うへ」
 黒が「手前へ」を示す

外側から見た図

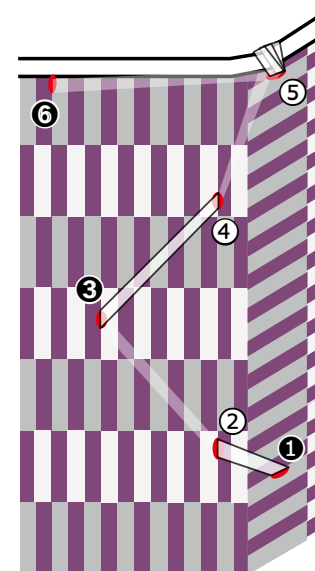
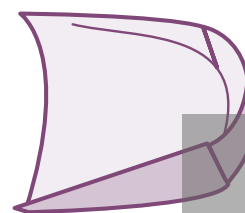


図 4-12 アクドを結いつける順番

アクドを縫ったカラは後ほどオオゲエシを結うのに用いるので、切らずに、イタミから出ている長いヒゲの間に絡ませて休ませておく (図 4-13)

ヒックリカエシメエも同様に縫い合わせる

2. ウデギを結いつける

(1) ウデギをはめる

- ① ソトダケをはめる (図 4-13)
 U字にしておいたソトダケに箕をはめ込み、ソトダケの形が均等になるように調整する
 ※ この時、ソトダケのモトがヒックリカエシメエになるようにする (図 4-14)
 ※ 調整は、ソトダケの両端に仮止めしてあるカラを、どのヒゲ (イタミの両端から飛び出た長いヒゲ) の間に通すかでバランスをとる (図 4-13)

- ② ウチダケをはめる
 ウチダケの両端を左手で押さえ、ソトダケを仮止めしているカラの下側に通す
 ウチダケの湾曲部をアクドの上端に合わせてたら、両端を押さえていた左手を一気に離し、ウチダケを箕に沿わせる

この時、ソトダケのモト側にウチダケのウラ側がつくようにはめる (図 4-14)

はめ込んだ後、ウチダケの曲げ具合を調整する

(2) ウデギをカラで結う | トツケとナガイ

※ ウデギを結いつける順番は図 4-15 の①~⑧のとおり
 ①⑦⑧はカラを継ぎながらひと続きで結う
 ③と④はそれぞれ短いカラを 1 本ずつ使う
 ②⑤⑥はカラを継ぎながらひと続きで結う

- ① トツケを結う (p.48 図 4-16、p.46 参照)
 ※ カシャゲメエのトツケ → ヒックリカエシメエのトツケの順に行なう
 ※ カラはアクドを縫ったカラを切らずに用いたものを使う。カラの残りはオオゲエシで使うので、長いままとっておく

先ほどアクドを縫って休ませておいたカラ (p46 図 4-12 の④) をウデギの上に乗せ、箕の外側から内側にむかって⑤に出す

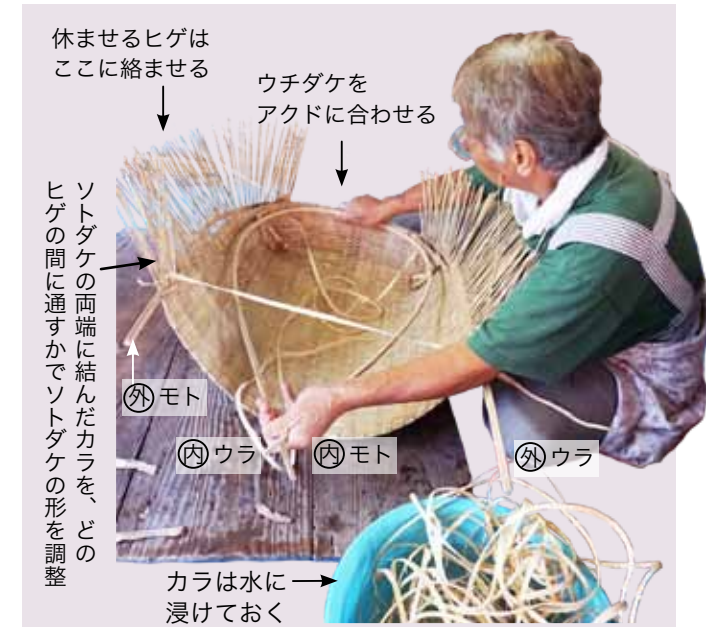


図 4-13 ウチダケをはめる ウチダケを押さえていた左手を離すと、ウチダケがバシン! と箕に付く

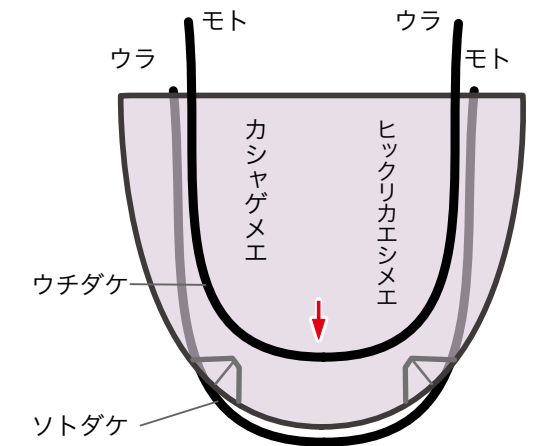


図 4-14 ウチダケとソトダケのモトとウラ

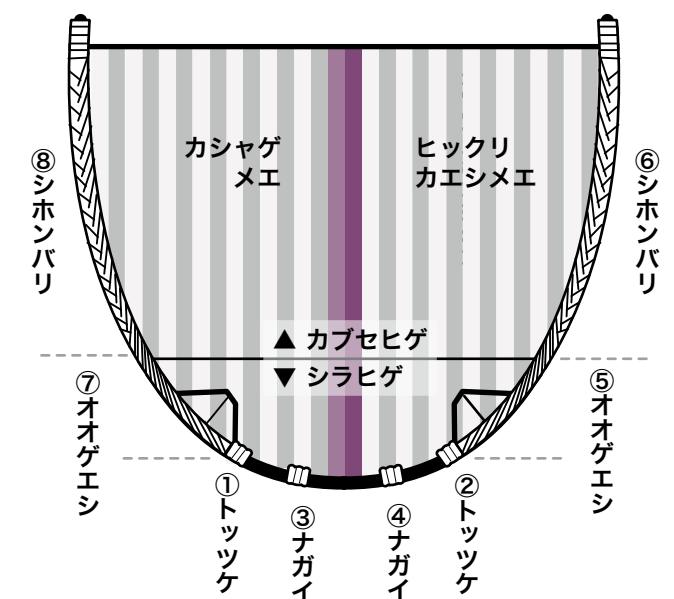


図 4-15 カラを結いつける順番

同じ⑤の穴でさらに2回巻く
 この時、箕の中心に向かってカラをずらしながら巻き、
 最後に同じ⑤の穴から箕の内側に出す
 ※ 口にくわえて引っ張るなどして、きつく締める
 ※ カラのツルツル面が上になるように注意

⑤から箕の内側へ出したカラを、⑥から箕の外側へ出
 し、ヒゲに絡めて休ませておく
 ※ ⑥の位置は p.46 参照

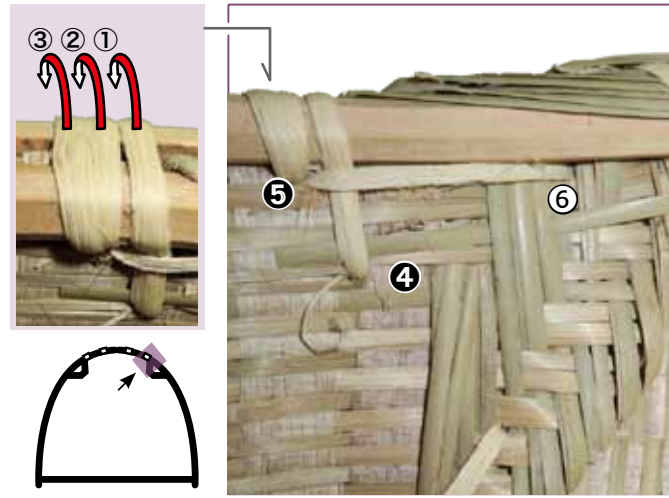


図 4-16 トツケを結う

② ナガイを結う (図 4-17、4-18)

※ カシャゲメエのナガイ → ヒックリカエシメエの
 ナガイの順に行なう
 ※ ナガイは一斗箕で2ヶ所、一斗五升箕で3ヶ所
 ※ ナガイは短めのカラをそれぞれ1本用いる

トツケを結ったフジから数えて5本目のフジに、箕
 の外側から内側に向けて、モト側からカラを通し、図
 4-18の通り、ナガイを結う

同様にすべてのナガイを結う

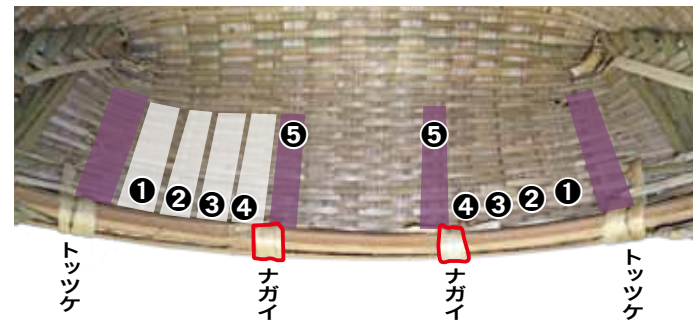


図 4-17 ナガイを結いつける位置 トツケのフジから5本
 目のフジの、4本目寄りの部分にカラを通し、ナガイを結う。
 一斗五升箕の場合はフジの間隔を4本にし、3ヶ所結う

3. ヒゲの処理 オオゲエシとシホンバリ

【調整の仕方】

● カラが足りなくなってしまった場合

図 4-19 のとおり、カラを繋ぐ (カラツナギ)

※ カラツナギはウチマキ (p.51) ではやらない方がよ
 いため、ウチマキの途中でカラがなくなりそうな場
 合、ウチマキに入る前にあらかじめ継いでおく
 ※ カラツナギは箕の外 (おもて) 側で行なう

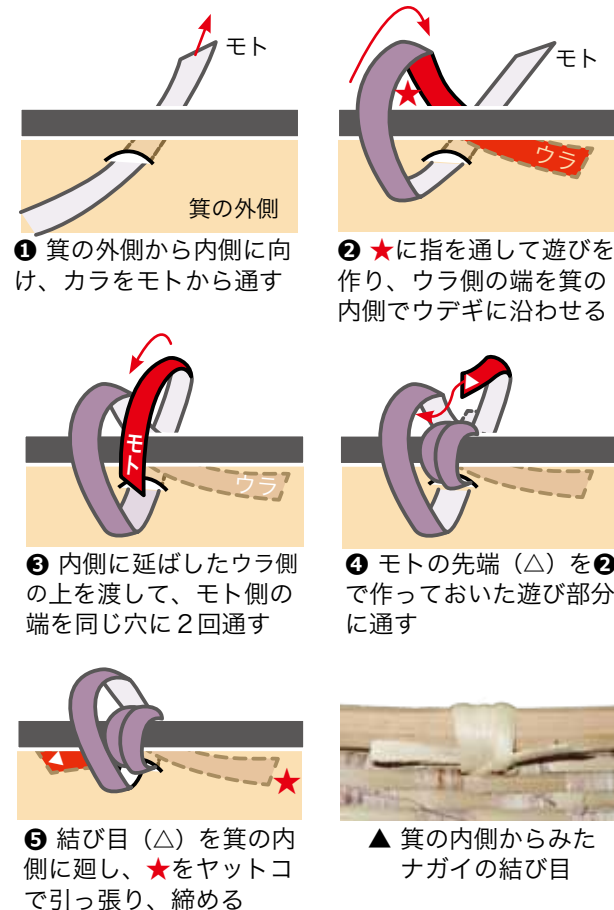


図 4-18 ナガイの結び方

(1) ヒックリカエシメエの

オオゲエシをつくる | シラヒゲの処理

※ シラヒゲ部分をオオゲエシにするので、シラヒゲが
 多い箕の場合はオオゲエシを3回以上行なう必要が
 ある。ふつうは五升箕で2回、一斗箕で3回

① 準備

フシのあるヒゲは折れやすいため、フシ部分をはさみ
 で切り落としておく

② カラを箕の内側へ渡す

トツケを結って休ませておいたカラを、5~6本先(内
 外合わせて10-12本)のヒゲの間を通して箕の内側に渡
 す (図 4-21 A)

③ 内側のヒゲを箕の内側へ倒す (オオゲエシ)

内側に並んだヒゲ5~6本を、1から順に箕の内側に
 に向けて倒し、②で渡したカラで押さえる (図 4-21 A)

※ ヒゲを内側に倒す時は、全てのヒゲをひとつにま
 とめ、最後のヒゲが一番上にくるように重ねる (図
 4-20)

※ 最初の1本がカブセヒゲになっている場合、内側に
 に向けて倒すことができないので、ねじって内側に倒
 す (図 4-25 / p.35 図 3-33 でアクトのフジを挟む際、
 カブセヒゲがナカ7段目のフジの上に来ていた場合、ア
 クト側に組み込まない。このため、仕立ての時まで残っ
 ている)

④ 外側のヒゲを内側へ倒す

外側に並ぶヒゲを、カラを渡した部分から2~3本残
 して箕の内側に倒し、先に倒したヒゲとあわせて、カ
 ラで押さえる (図 4-21 B)

この時、最後に倒したヒゲが一番上にくるように、ヒ
 ゲをひとつに重ねてまとめる

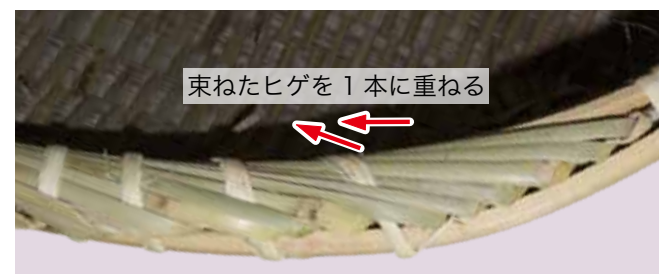


図 4-20 オオゲエシ ヒゲを1本に重ねてまとめる

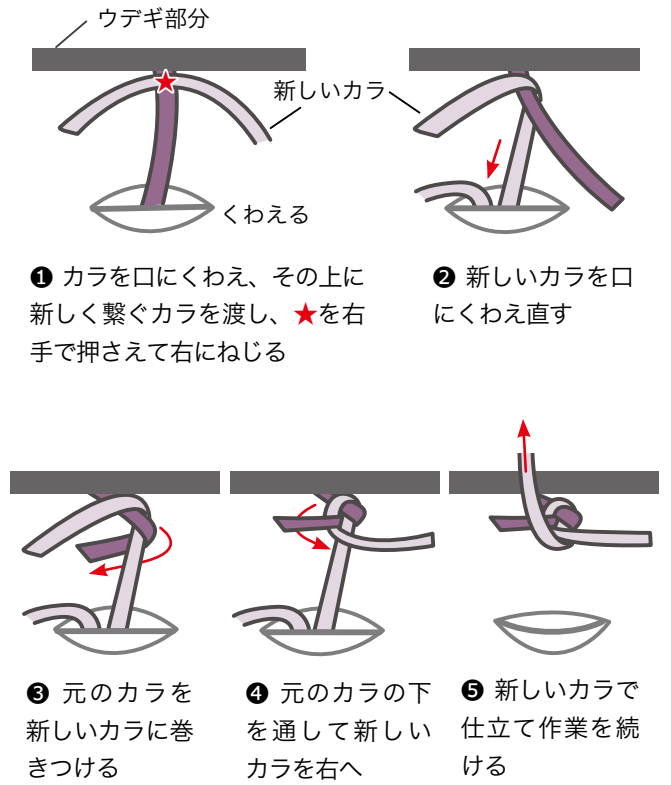


図 4-19 カラツナギ

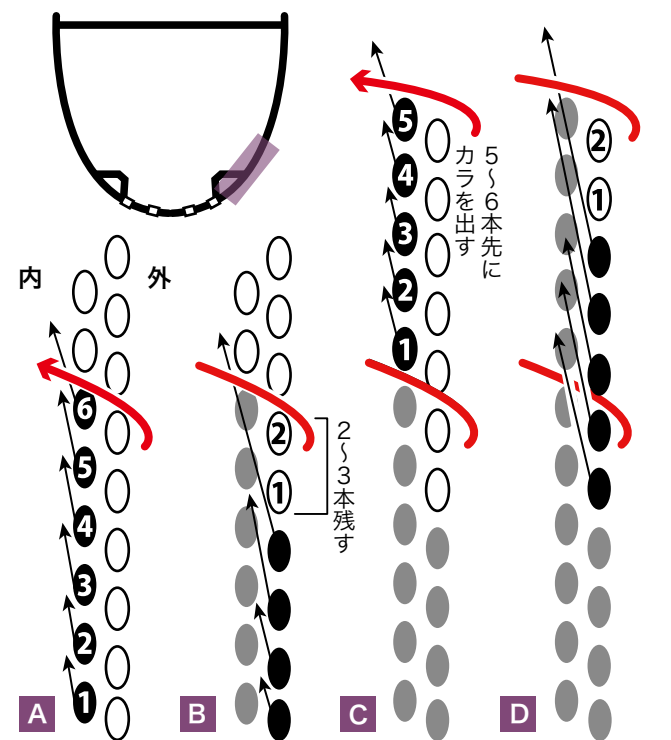


図 4-21 オオゲエシの手順 ※左上図の■部分

○ 処理前のヒゲ ● これから倒すヒゲ
 ● 倒したヒゲ → カラ → ヒゲを倒す方向

⑤ カラを外側に通す

箕の内側からキリで下記①の位置のフジ（ウデギのすぐ下）に穴をあけ、カラを箕の外側に通す（p.49 図4-21 C）

シラヒゲ部分が終わるまで、②～⑤を繰り返す

ヒゲを通す穴の位置はおおよそ以下の通り（図4-22）

- ① アクドが終わった部分
- ② シラヒゲとカブセヒゲの間
- ③ ②の穴のヒゲ2本分先（内外合わせて4本）
- ※ ③の後はシホンバリ。シホンバリではカラはすべてヒゲ2本分先（内外合わせて4本）に通す

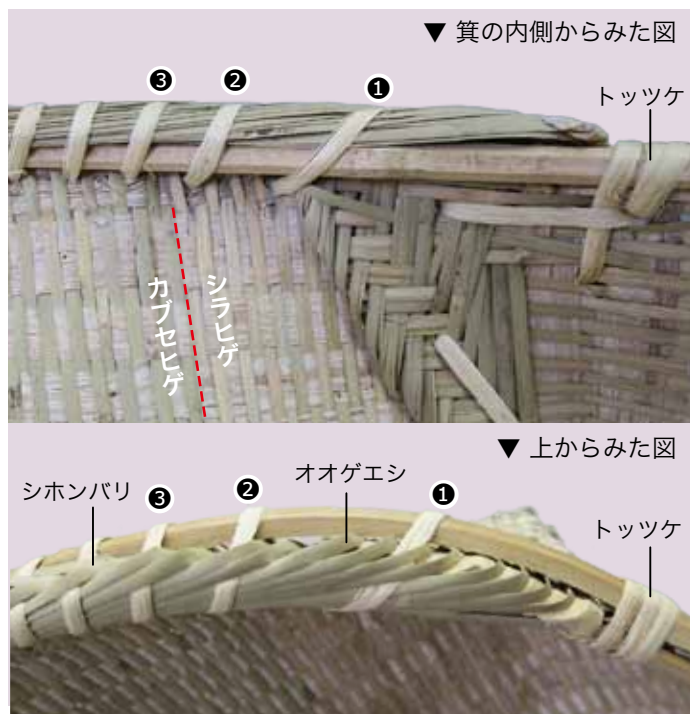


図4-22 カラを通す位置（オオゲエシ）

(2) ヒックリカエシメエの

シホンバリをつくる | カブセヒゲの処理

① オオゲエシからシホンバリへの移行

オオゲエシからシホンバリに移る際、シホンバリの基本形（図4-23 E）に移行するための調整をする

※ヒゲの本数等によって臨機応変に対応する

② ヒゲ2本を外側に、2本をねじって内側に倒す（シホンバリの始まり）

図4-23 Eの3と4*を外側に倒す（図4-23 F）

カラを内側に渡してヒゲ3・4*を押さえる（図4-23 G）

ヒゲ1と2の根元を左手で持ち、ねじりながら内側に倒して、渡しておいたカラで押さえる（図4-23 H）

※ この部分はカブセヒゲ（皮が上）なので、そのまま内側に倒すことが物理的にできない。そのためヒゲを持った左手首をねじりながら倒す（図4-25）。外側に倒す場合はねじる必要なし

③ カラを箕の外側に通す

ヒゲ2本分先（内外合わせて4本）のフジ（ウデギのすぐ下）にキリで穴をあけ、カラを外側に向けて通す（図4-23 I）

※ これで基本形（図4-23 E）に戻る

②～③を繰り返す、ヒゲが残り20～30本程度になったらカシャゲメエのオオゲエシとシホンバリに移る

※仕立ての順番については図4-26 参照

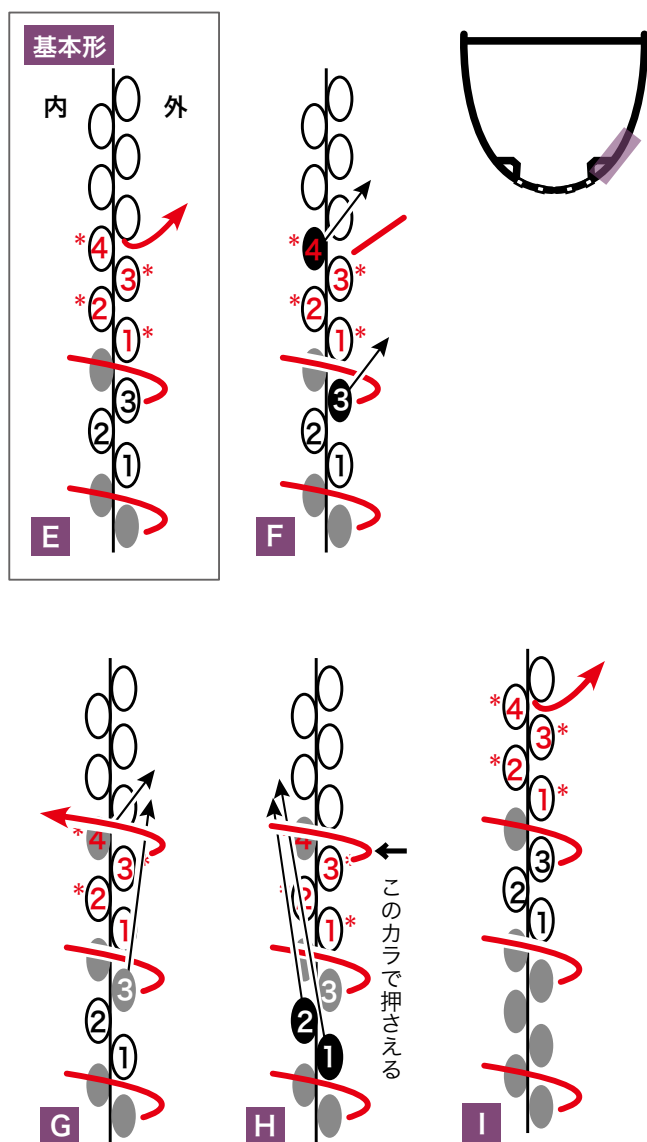


図4-23 シホンバリ

(3) カシャゲメエの

オオゲエシとシホンバリをつくる

ヒックリカエシメエと同様に、オオゲエシとシホンバリをつくる

※ カシャゲメエはヒゲの残りが12～13本になるまでシホンバリを進める

※ 手の使い方はヒックリカエシメエと左右逆になるので、ヒゲを内側にねじって倒すのは右手になる

(4) ミサキの処理 | ウチマキ

ヒックリカエシメエから作業する

① ウデギの先端を切り揃える

ミサキより1cm位ウデギを残して切り落とす（ウチマキの場合）

※ p.52の⑥でヒゲと一緒にウデギを切り落とす場合もある

② ヒックリカエシメエのシホンバリを進める

20～30本程度残していたヒゲの残りが、10本程度になるまでシホンバリを進める

③ 外側のヒゲを切る

10本程度残したヒゲのうち、外側のヒゲを何本か間引くように切り落とす

※ ヒゲを切るのは、ウチマキのカラを巻いた時にスッキリするように。人によっては外側のヒゲをすべて落とす場合もある

④ ミサキのヒゲを折り返してシホンバリで固定する

ミサキの2本重ねたヒゲを10cm程度に短く切り揃える

ソトダケの両端を仮止めしていたカラを外し、ミサキの2本重ねたヒゲをウデギに沿って折り返す（図4-27）

そのヒゲを押さえるようにシホンバリを続ける

※ シホンバリはミサキから数えて3本目のヒゲと4本目のヒゲの間まで。ここにカラが入ったら、次はウチマキ（⑥～）に移る

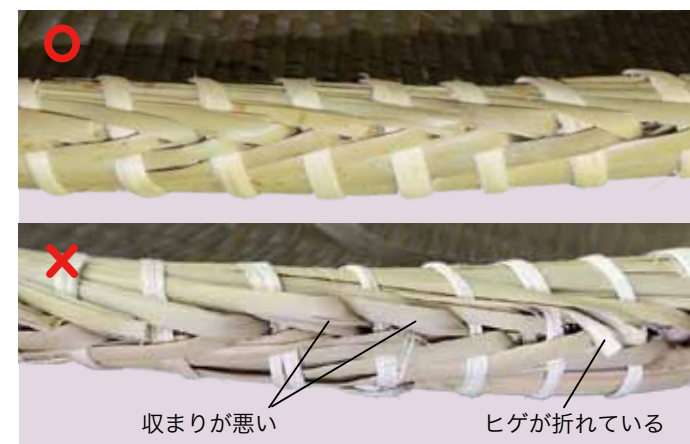


図4-24 シホンバリ 上が秋葉千枝子さん、下が初心者作



図4-25 内側に倒す ヒゲの根元を左手で逆手に持ち、ねじりながら内側に倒す

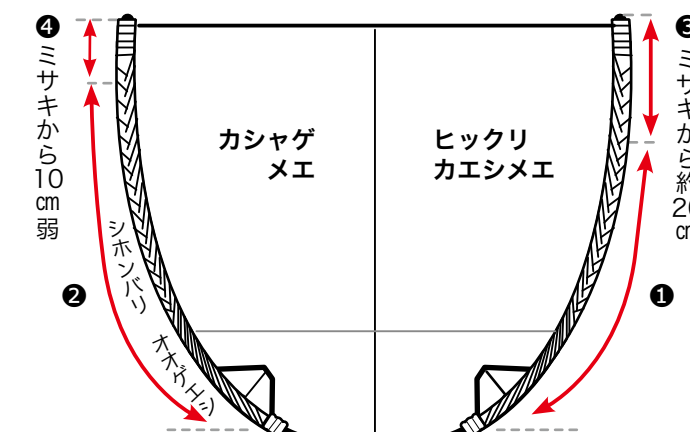


図4-26 仕立ての順番 一気に片方だけ進めず、左右交互に作業する

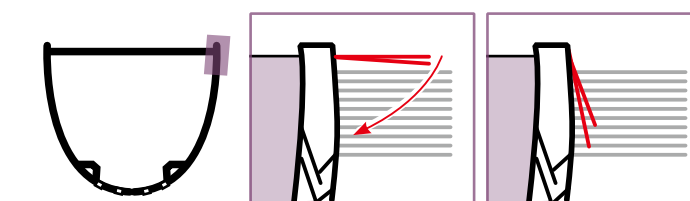
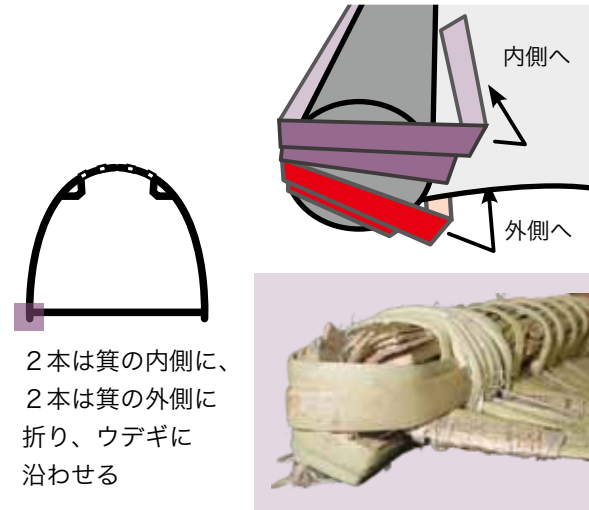


図4-27 ミサキのヒゲを折り返す

⑤ ヒゲの束を固定する

残ったヒゲの束をまとめてミサキの方に向けて倒し、カラを一度巻いて固定する。カラは最後のシホンバリを固定したカラと同じ穴（ミサキから3本目と4本目のヒゲの間）に通す



2本は箕の内側に、2本は箕の外側に折り、ウデギに沿わせる

図 4-28 ウデギの先端の処理

⑥ ヒゲをウデギに沿って折り曲げる (図 4-28)

ヒゲの束のうち、上の方にある質のよいヒゲを4~5本を残し、後はウデギの長さに合わせて切り揃える
残した4~5本のヒゲを10cm程度に切り揃える
※ 残す4~5本のヒゲは、フシなどのないヒゲにする

残した4~5本のヒゲの内の2本を重ね、ウデギの先端を隠すようにしながらウデギに沿って箕の外側に折り曲げる

残りのヒゲ(2~3本)を重ね、ウデギの先端を隠すように、ウデギに沿って箕の内側に折り曲げる

※ ヒゲの収まりが悪い場合は、ヒゲを切り落とし、別のヒゲを足す

⑦ ヒゲをカラで巻いて固定する (ウチマキ)

ミサキからアクド方向へ引き返すようにカラを巻いていき、折り曲げたヒゲを固定する。カラはヒゲとヒゲの間に順に通し、合計6~8回、隙間なく巻く

※ 巻く時にカラがねじれないように注意する

※ ウチマキのカラがシホンバリを巻いたカラの上に来て、その部分が膨らんでしまう場合は、下にくるシホンバリのカラを切る。カラを切ったら、切った端をウデギに沿って折り返して伸ばし、ウチマキのカラで固定する

※ しっかりとカラで固定されるまで、ウデギの先端を持った手を離さないよう注意する

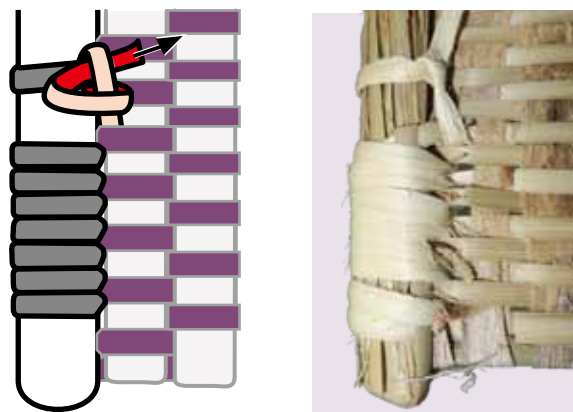
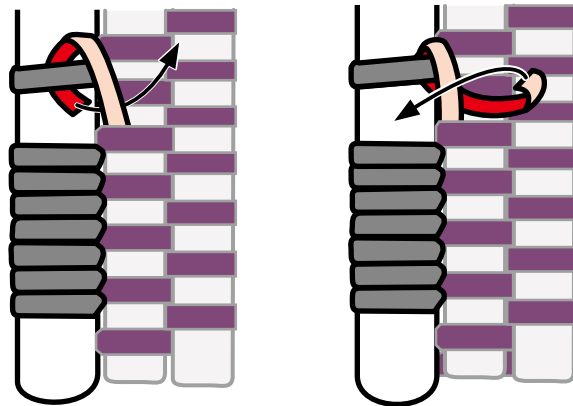


図 4-29 ウチマキのカラの止めかた (箕の裏側からみた図)

⑧ ヒゲの処理 (図 4-29)

カラを巻き終わったら、カラを箕の裏側に出すヤットコを使い、カラの端をシホンバリを固定したカラに通し、図 4-29 の通りとめる

⑨ 仕上げ

ウデギの先端をハサミの裏などで叩き、なじませる
また、仕立てをするとうどうしてもイタミにシワが寄ってしまうので、ハサミの持手などでイタミ部分をグリグリこすってシワを伸ばす

4. アクドの補強

アクドの角部分の補強のため、図 4-30 のとおり、スミカ (フジ) をツバグシでヒゲに通す
両方のアクドにスミカを施す

※ フジにはナカフジやシンフジを用いるのがよい。カワフジは乾きがよいが、切れやすい

※ スミカは必須ではないが、アクド部分が一番弱い
ため、長く使うためには効果的

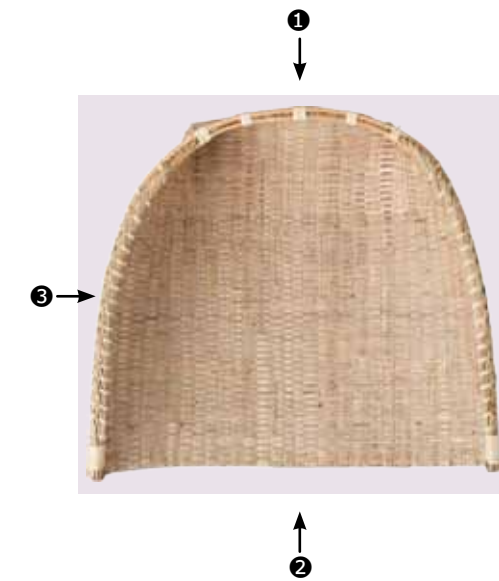
※ スミカを通すヒゲの位置はおおよそであり、厳密ではない

図 4-30 スミカの方法



① カブセから2本目のヒゲの下に通す
② 横に折り返してカブセから5本目のヒゲの下に通す
③ 上に折り返してカブセから5本目と7本目のヒゲの下に通し、先端を切り落とす

完成!



※この箕にはスミカは施されていない



用語集

※ cf. は「参照せよ」、ページ数の太字は図版のある個所を示す

アクト

アクト【構造】 箕の立ち上がりの部分。コシともいう。※アクトは踵を指す方言 →**p.2-3、6、35-36**

アヤをとる【技法】

織り物の用語。材同士を交差させて噛み合わせをつくること（cf. 押さえヒゲ）

アリワタリ【状態】

フジの皮で節のように硬くなった部分。アリが渡った跡の意味。カワフジに穴があくので使えない

→p.14-15

アワイがよい【状態】

塩梅がよい、ふわふわっとして柔らかくなること。ヒゲにもフジにも用いる

イタミ【構造】

ヒゲとフジを織ってつくった板状の構造物。これを折り曲げて枠をつけると箕になる →**p.2、30**～

ウチダケ → ウデギ

ウチマキ【構造・技法】

ウデギの両端にカラを巻きつける処理方法、またその部位。ウデギをミサキより1 cm程度長くする。現在はウチマキが主流だが、大正期まではウデギをより長く残すツノマキが一般的だった（cf. ツノマキ） →**p.3、51**～

ウデギ【部材】

イタミを結いつける半円の枠。現在はモウソウチクを用いるが、かつてはヨソドメ（和名ガマズミ）を用いた。箕の内側につけるものをウチダケ、外側につけるものをソトダケやトダケと呼ぶ（ガマズミの時代はウチギ、ソトギと呼んだ）

→**p.3、20、42、47**

ウナンカワ【部材】

フジの皮を芯から剥がしたもの。ウナギの皮に似ているため、この呼び名になったとの説がある

→**p.17、18**

ウラ【構造】

木やタケの梢側（cf. モト）→**p.5**

ウラコケ【状態】

ヒゲのウラ側が細くなっていること。本来は幅が均一なほうがよい

ウラテン【状態】

イタミをつくり終えた段階で、シマイフジを入れた部分（カブセヒゲの部分）のヒゲのウラ側が、シマイフジの上にきている状態。本来はモト側が上にくる →**p.38**

オオゲエシ【技法】

仕立ての際、イタミから飛び出たシラヒゲの処理方法。ヒゲを数本重ねて箕の内側に向けて倒し、固定する（cf. シホンバリ）→**p.3、44**

54

押さえヒゲ【部材】

ユミにヒゲ通しする際、ヒゲがバラバラにならないようにカシャゲメ工側に挟んでおくヒゲ→**p.27**～**29**

カシャゲメエ【構造】

イタミで最初につくる半身。アクトを上にした場合、向かって右側（cf. ヒックリカエシメエ）→**p.2、34**～、**38、51**～

カブセヒゲ【部材】

ヒゲを、皮側が上になるように用いたもの（cf. シラヒゲ）→**p.2、29**

カラ【部材】

フジの芯から薄く剥ぎ取り、さらに2枚にヘイ

でつくった紐状の材。アクトやウデギを結うのに用いる

→**p.3、19、43**

カワフジ【部材】

フジの皮（ウナンカワ）を3層に分けた時、一番外皮側の層にあたる材。イタミづくりではソデの材として用いる（cf. シンフジ、ナカフジ） →**p.2、24**

キガノル → フタツカワ

キジュン【道具】

ソトダケの型で、これを基準にモウソウチクを曲げる。ヨソドメ（和名ガマズミ）製 →**p. 5、43**

キタチ/コタチ【道具】

イタミづくりの際、ヒゲの間にフジを押し込んだり、ヒゲの間に挟んでおく木製の太刀。背の部分に、箕のナカの幅とソデの幅を示す印が刻んであり、これで尺を測る

→**p.4、6、7**

コバ【部材】

何層かに剥いだフジの長辺の両端部分。木端。ここが厚くなっているのでフジコサエで薄く剥ぎとる →**p.31**

サキシノ【部材】

シノダケ（和名アズマネザサ）を4～6割にしたもの →**p.12**

シホンバリ【技法】

仕立ての際、イタミから飛び出たカブセヒゲの処理方法。ヒゲを左右に倒して固定する（cf. オオゲエシ）→**p.3、44**

シマイフジ（シメフジ）【部材】

イタミのソデをつくる際、7本（五升箕なら5本）のカワフジを入れた後、最後にミサキからカブセヒゲまで通す約0.5cm幅のフジ →**p.37**

シャクボウ【道具】

部材を切り分ける際、長さを揃えるための基準として作った棒。尺棒。シノダケやモウソウチクを切る際に用いる →**p.10、20**

シラヒゲ【部材】

ヒゲを、身側が上になるように用いたもの（cf. カブセヒゲ）→**p.2、29**

シンフジ【部材】

シンツキともいう。フジの皮（ウナンカワ）を3層に分けた時、一番内側の層にあたる材。イタミづくりではナカの材として用いる（cf. カワフジ、ナカフジ） →**p.2、24**

スミカ【部材】

傷みやすいアクト部分を補強するために、アクトの角に重ねて入れるフジ。スミカワか →**p.53**

ソシがでる【状態】

ソウシとも言う。毛羽のこと。ヒゲ洗いした際にシノのケバダチがとれること →**p.25**

ソデ【構造】

イタミの脇の部分。ナカの外側。片側にフジ7本（五升箕で5本）入る（cf. ナカ） →**p.2、6、37**～

ソトダケ → ウデギ

タマギリ【技法】

1本の長い木やタケを、同じ長さの部材に切り分けること →**p.20**

ツクル【技法】

イタミを織る作業やアクトを編む作業、仕立て作業などはすべて「つくる」と表現する

ツノマキ【構造・技法】

ウデギの両端にカラを巻きつける処理方法、またその部位。ウデギをミサキより3～4 cm長くする。かつては長く伸びた部分を唐箕などに引っ掛けて用いたが、大正期以降、おもに東京方面の顧客の要望で、ウデギがより短いウチマキが主流となった（cf. ウチマキ） →**p.8**

ツバグシ【道具】

ヒゲの間にフジを通す際に用いる道具。竹製や金属製がある。片側に作られた割目にフジを挟み、ツバグシをヒゲの間に通すことで、フジも通る仕組み →**p.5、7**

トツツケ【構造】

アクトを縫い合わせ、同じカラで両アクトの上でウデギを結いつける、その一連の部位。カラは、そのままオオゲエシをつくるのに用いる（cf. ナガイ）→**p.45**～、**48**

ナカ【構造】

イタミの中央部分。ユミ張りフジ2本を挟み、一斗箕なら片側にフジ7本（五升箕で5本）入る（cf. ソデ）→**p.2、6、34**～

ナガイ【構造】

イタミにウデギを結いつけるため、両トツツケの間に2～3ヶ所、カラを結った部分。一斗五升箕の場合は3ヶ所、一斗箕や五升箕の場合は2ヶ所が一般的（cf. トツツケ）→**p.48**～

ナカフジ【部材】

フジの皮（ウナンカワ）を3層に分けた時、真ん中の層にあたる材。1枚のウナンカワを4層に分けた場合はナカフジが2枚となる。イタミづくりではナカの材として用いる（cf. カワフジ、シンフジ） →**p.2、24**

ノセカワ【技法】

イタミづくりの際、穴があったり幅が狭いフジの上に短く切った別のフジを重ね、補強すること →**p.33**

バリ【技法】

キタチでヒゲの間にフジを押し込んだ後、箕づくり小刀の先を使ってさらにフジを押し込むこと。バリをかくという →**p.32**

ヒゲ【部材】

薄くヒゴ状に裂いたシノダケ（和名アズマネザサ）の外皮部分。箕の横材になる →**p.2、13**

ヒゲクバリ【技法】

イタミづくりの際、ヒゲを上下左右に引っ張り、ヒゲ同士の噛み合わせを調整すること →**p.32**

ヒックリカエシメエ【構造】

イタミで、ひっくり返して後からつくる半身。アクトを上にした場合、向かって左側（cf. カシャゲメエ） →**p.2、38**～、**49**～

ヒヤス【技法】

水に浸けること

ヒロウ（拾う）【技法】

イタミづくりの際、フジの下にあるヒゲを1本ずつ手で持ち上げること

フタツカワ【状態】

キガノルとも言う。フジの皮の上に、さらに身と皮がのっていること。フタツカワのフジは、カワフジに穴があくため使えない →**p.14、15**

ヘグ【技法】

サキシノ、カラ、ウナンカワ（フジ）などの部材を薄く剥ぎ、何層かに分けること

ミサキ【構造】

箕の開き口の部分（cf. アクト） →**p.2、3**

メがある【状態】

モウソウチクやシノダケの節の部分に出現する芽。これがあるとそこから部材が折れてしまうため、メは避けるのが原則 →**p.12**

モト【部材】

木やタケの根元側（cf. ウラ）→**p.5**

ユミ【道具】

イタミをつくる際、最初の2本のフジ（ユミ張りフジ）を取り付けるモウソウチク製の道具。一斗箕用、五升箕用など箕の大きさに応じたユミがある。おもて面に、アクトの位置、カブセヒゲとシラヒゲの境の位置、ミサキの位置を示す印が刻んであり、これを基準にユミ張りフジにヒゲを挟んでいく→**p.4、6、27**

ユミハリフジ【部材】

ユミに張るフジ。やや細めで質のよいナカフジやシンフジを用いる →**p.26、27**

あ と が き

今回の撮影では、伝統技術の記録撮影で多く用いられる「技術者と対面するカメラポジション（客観的な映像）」に加えて、「技術者の視線を模すようなカメラポジション（主観的な映像）」を意図的に多用した。伝承教室の皆さんに聞き取りをして、「肩ごしに作業しているのが見たい」という声があったことが発想のひとつになっている。撮影の角度やサイズによって得られる情報に違いがあるのは明確であり、技術習得を目的とした場合に優先して必要な情報は、通常の「対面する（客観的な）カメラポジション」よりも、「技術者の視線を模した（主観的な）カメラポジション」から多く得られるのではないかと考えた。

箕づくりは複雑で、しかも実際の作業は早く、一見しただけでは何が行なわれているか分からない。また、技術者自身がぐいぐいと視点を動かして、のぞき込んだり反対側から道具を使ったりするアクロバティックな動きが多く、それをどうカメラで捉えるかという課題があった。

そのため機動力を優先した撮影となった。カメラは2台、録音担当者はなし、ノイズも含み、記録者も写り込んでいる実際の映像を見ていただければ、ある程度記録の現場も見て取って頂くことができよう。通常の映像記録であればテンポや収録時間の制限でカットするような部分も、今回は技術習得の助けとなる映像記録作成を主眼に置いたため、長時間のまま収録する形をとった。

技術の習得、伝承のための（ひいては無形の文化財である伝統技術の再興・復元の一助となるような）映像記録とはどのようなものか。映像をどう活用すればよいのか。文化庁の工芸技術記録映画のように、端正な作りと記録を目的とした記録映画が必要である一方、それとは手法や考え方を異にする映像記録が必要となるだろう。また、技術の習得のためには映像だけでは十分でなく、文字や静止画、イラストなど図解による解説も合わせて作成される必要がある。

一方で、技術の勘所や力加減といった身体的な要素は果たして映像で捉えうるのか、また捉え得たとしても、身体性に個人差がある中で、それが別の技術者に適しているのかという問いもある。「技術を見て盗む」（自分で試行錯誤しながら身体で体得する）という、技術に対してよく使われる箴言を実現するだけの記録性を、映像は果たして提供できるのだろうか。今回の映像記録の作成方法が唯一であるということはなく、技術の記録におけるモデルケースのひとつとして提案、議論ができれば幸いである。

度たびの撮影を快く受け入れてくださった木積箕づくり保存会、伝承教室の皆さまに感謝いたします。

佐野真規（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

追記 通常の民俗調査報告書であれば、技術の背景となる様々な事象（例えば箕の用途や販路、分業制、技術の変遷、原材料の持続的確保の方法など）も併せて記載するべきであるが、技術に集中しなかったこと、またすでに TEM 研究所の優れた研究成果（『木積の箕づくり』2006 年）があることなどから、今回は省略したことを申し添えておきたい（今石）

【スタッフ】

今石みぎわ 東京文化財研究所無形文化遺産部（報告書執筆、報告書・映像の監修）
佐野真規 東京文化財研究所無形文化遺産部（映像撮影・編集）
小田原直也（映像撮影補佐）
黒河内貴光 筑波大学人文社会科学部研究科（報告書 編集・デザイン）
石井里歩 学習院大学文学部（報告書 編集補佐）

【表紙写真】 木積の一斗箕（秋葉千枝子さん、2016 年 10 月作）／撮影：久野太朗（株式会社 コウ写真工房）

【協力くださった方々】（敬称略、50 音順）

秋葉千枝子、金杉光恵、作佐部一男、佐久間秀勝、古山一郎、行木光一（以上、箕づくりの先生および木積箕づくり保存会）
石毛典子、大木朋子、大橋則夫、岡村三郎、香取文雄、國井秀紀、篠原正、鈴木光治、鈴木信行、高木きぬ、土屋幸雄、中貫妙子、野山清治、飛田和正吉、水野芳夫、山本美佐子（以上、木積箕伝承教室の皆さま）
大山孝正（福島県文化財センター白河館）

【特別協力】

山本美佐子（木積箕伝承教室参加者）

國井秀紀（福島県文化財センター白河館） ※図 1-11、1-12 右、2-3、3-3 については國井氏に提供いただきました

【おもな参考文献】

TEM 研究所『木積の箕づくり』2006 年

氷見市立博物館『氷見の手仕事』2011 年

南相馬市教育委員会『おだかの箕づくり』2007 年

【調査日と主な内容（調査者）】

2015 年 1 月 24 日 伝承教室（シノダケとフジの採集）での調査記録（今石）

2015 年 3 月 6 日 伝承教室（シノダケ加工）での調査記録（今石）

2015 年 4 月 4 日 伝承教室（フジの加工）での調査記録（今石）

2015 年 6 月 6 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録（今石）

2015 年 9 月 5 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録／撮影事業の開始（今石・佐野）

2015 年 10 月 5・6 日 イタミづくり～仕立ての映像撮影（秋葉千枝子氏）（今石・佐野・山本）

2016 年 1 月 23 日 伝承教室（シノダケとフジの採集）での調査記録（今石・佐野・國井・大山孝正）

2016 年 3 月 5 日 伝承教室（シノダケ加工）での調査記録・撮影、

モウソウチク採集の映像撮影（古山一郎氏）（今石・佐野・山本・國井）

2016 年 4 月 2 日 伝承教室（フジの加工）での調査記録・撮影（今石・佐野）

2016 年 5 月 7 日 藤祭りでの調査・撮影（佐野）

2016 年 7 月 2 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録・撮影（今石）

2016 年 8 月 6 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録・撮影（今石・佐野）

2016 年 9 月 3 日 伝承教室（フジの加工、イタミづくり）での撮影（佐野）

2016 年 10 月 1 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録・撮影（今石・佐野）

2016 年 10 月 26・27 日 イタミづくり～仕立ての映像撮影（秋葉千枝子氏）（今石・佐野・國井・山本・黒河内・石井）

2016 年 11 月 5 日 伝承教室（イタミづくり）での調査記録（今石）

2016 年 11 月 29 日 技術の実践記録（仕立て）（今石・山本・黒河内・石井）※於：東京文化財研究所

2017 年 1 月 28 日 伝承教室（シノダケとフジの採集）での調査記録・撮影（今石・佐野・黒河内）

2017 年 2 月 4 日 伝承教室（シノダケとフジの採集・加工）での調査記録・撮影

報告書の検討・確認（今石・佐野・黒河内）

2017 年 3 月 4・5 日 映像上映・検討会（今石・佐野・山本）

木積の箕をつくる

千葉県匝瑳市木積

平成 29 年（2017）3 月

編集・発行

独立行政法人 国立文化財機構

東京文化財研究所 無形文化遺産部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 TEL 03-3823-4927

※ 本報告書は映像記録『木積の箕をつくる 千葉県匝瑳市木積』とセットです

